

よわ

同じ。(強弓に對して)

よわよわ 弱弱【貌】いかにも弱々なるさま。(強強に對して) 著る運盡き果て候うて、力弱弱と覺え候うて。

よわよわじ 弱弱し【形二】いかに弱よわよわじ 弱弱し【動四自】極度に衰へ弱る。極度に困る。困りぬく。

よわよわ 弱聲【名】衰へ弱る聲。新六「夏深き梢の蟬のよわり聲只山里のひびらしぞ鳴く」。

よわよわ 弱拔く【動四自】よわよわきより弱果つ【動下二自】よわよわき(弱切る)に同じ。

よわよわめ 弱目【名】丁度弱りたる時。弱りたる間際。よわめ。

弱目に祟目【句】泣面【ひび】に蜂が蟄すに同じ。【諺語】

弱目の靈怪【句】前條に同じ。【諺語】

よわる 弱る【動四自】弱くなる。衰弱す。新古今「きりぎりす夜寒に秋のなるまに弱るか聲の遠きかりゆく」。

財政などおとろふ。掛け衰ふ。【厄介に思ふ。こまる。】

よお 夜居【名】夜間、詰めて寝ねざること。【古語】

【僧が、夜、加持・祈禱などのために、側に居ること。源氏「世にかしこきひじり……今は、夜居など、いと堪へがたう覺え侍れど」。

源氏「夜居の加持の僧」の略。撰記「自今夜請・教靜阿闍梨、爲「夜居」。

よお 餘威【名】後代まで残れる威勢。

よおん 餘韻・餘韻【名】後までも残るひびき。餘音【ひびき】。

よおん 餘韻【名】言外の趣。餘情。

よおん 節折【名】古、六月と十二月との大祓の時、命婦【ひびき】竹の枝にて、天皇及び中宮・東宮の御體の長をはじめ、處處の寸法を取りて、宮主【ひびき】に切りあてがはせ、御祓をなせしこと。

節折の藏人【句】次條に同じ。其【み】な月・しはすの晦【ひびき】のよをりの藏人。

節折の命婦【句】節折の時に、その事に仕ふる命婦、なかとみめ。建武年中行事「よをりの命婦、竹を持ちて参りて」。



【發音】行第一の音。子音rが母音aに結び附き、rの音は、固有の國語に於ては、現すところと記すとの兩法あり。本書は、前者に依れり。【一語の中に、ちの直下にう又はふの續く時は、通例相合して、下の長音に發す。例へば、からうじて(辛うじて)らうじん(老人)さうふ(掃ふ)らうそく(蠟燭)をカロオジテカロオジン。トロオロオックと發音する類。但し、そのふが四段活用動詞の語尾なる場合には、口語にては、ふをうと發音し、その直前の音と音節を分ちて發音す。例へば、さうふ(浚ふ)らうふ(貰ふ)をサラウ・モラウと發音する類。

【字源】平假名らは漢字「良」(吳音ラウ)の草體、變體平假名をも同字の草體、發は「羅」(漢・吳音共にラ)の草體、萬葉假名としては、前記「良・羅」の外、字音に據れるものに「邏」「囉」「囉」「浪」「郎」「朗」「樂」「蘭」等、訓を取りたるものに「等」あり。

ら 羅【名】薄く綴りたる絹布。うすもろ。うすはた。うすぎぬ。源氏御經よりははじめ、玉の軸らの表紙。【鳥を捕ふる網。とりあみ。かすみ。ひるてん。】

ら 羅【名】(動)驢馬と馬とを交尾せしめて得る獸。通常、牝馬に驢馬の牡を配して得。體は馬に似て、勞働に耐ふ。驢馬の牝に牡馬を配して得るものは、體格、驢馬に近し。らば。

ら 螺【名】(動)赤螺【ひびき】長螺【ひびき】法螺【ひびき】蓋の一枚ある貝の總稱。まきがひ。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

らあけん

いふ語。ども。など。等【ひびき】。「等」【ひびき】「少女」(ら)「汝らたち」。

らあけん(荷「Laden」)【名】昔舶來せし、一種の羅紗。らんけん。

ら 羅衣【名】うすものにて仕立てたる衣服。うすもの。

ら 羅衣【名】(種)「羅」ををせ(松蘿)の

ら 羅衣【名】(動)あはざり(阿房島)に同じ。

ら 未【名】(動)又はその柄。

ら 來【名】(易)繫辭傳に「易、彰往而

來」とあり。未來。將來。

ら 雷雷【名】(支)那周代の酒樽の一種。形

ら 瓶に似、雲雷の模様を描けるもの。

ら 癩癩【名】(名)らびやう(癩病)に同じ。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

ら 癩癩【名】(名)風の物に觸れて發する聲。

らいから 來航〔名〕船に乗りて、國外より來ること。

らいから 來降〔名〕來りて降服すること。

らいがう 來迎〔名〕念佛の行者〔名〕が、臨終の際、一心に阿彌陀佛を憶念する時は、阿彌陀佛は、西方極樂淨土より來りて、この行者を迎へ給ふといふこと。彌陀の四十八願中、第十九願に説ける所なれども、淨土門中、淨土真宗にては、これを期せず。〔發遣〕に對して、平家三尊來迎あり、九品往生〔名〕疑なし。二高山の頂に上りて觀る日の出、江戸二色富士山の行者が、日の出を御來迎といふにもづきて。三らいがう〔御來迎〕に同じ。

來迎引攝〔名〕佛阿彌陀佛が來迎して淨土〔引攝〕給ふこと。平家「來迎引攝の悲願」

來仰の印〔名〕佛阿彌陀佛の衆生〔名〕を來仰する時の印相。右手を擧げて、佛に比し左手を垂れて、衆生に比す。善國善光寺の佛禮〔名〕し奉る事、二度なり。その内、初のは來迎の印にておはしき。次の度は來迎の印にておはしし候。

來迎の三尊〔名〕佛阿彌陀佛の來迎の時、左右に觀世音勢至の二菩薩を伴ひ來るといふ、その三尊。平家女院の御庵室へ入らせおはしし、障子を引きあけて觀覽あるに、一間には、來迎の三尊おはします。

らいがう 頼豪〔名〕人園城〔名〕寺の僧。實相坊と號す。伊賀の國守藤原有家の子。白河天皇、皇子を得んと欲し、酬ゆるに、その望む所を以てせんと約して、祈らしめられしに、中宮賢子、皇子を生みたれども、天皇恐れて、約を果したまはざりしかば、憤懣して、食を斷ち、應徳元年、飢死て寂す。年八十三。

らいがう いんぜふわん 來仰引攝願〔名〕佛四十八願中の第十九願。

らいがう 來仰賣〔名〕らいがうり

〔御來迎賣〕に同じ。

らいがうさん 來迎讚〔名〕佛僧惠心〔名〕の、彌陀來迎の旨を述べて作れる和讃。

らいがうばしら 來迎柱〔名〕佛堂にて、佛像を安置する場所にある圓柱。須彌壇〔名〕の四隅にあるものの如き、これなり。

らいがう まんだら 來迎曼陀羅〔名〕美にじざきうらいがう〔二十五菩薩來迎圖〕に同じ。

らいがう みだ 來迎彌陀〔名〕佛山城國嵯峨の二尊院の本尊なる阿彌陀如來。

らいがう ぬん 來迎院〔名〕山城國愛宕山。本尊は行基の作といふ藥師釋迦彌陀の三尊。承德年間、良忍の開基。良忍、宗旨弘通の傍又、聲明〔名〕を興隆す。今は廢類を極む。一名、大原寺〔名〕。

らいがう 來仰會〔名〕佛二十五菩薩の來迎に擬して、練供養〔名〕を行ふ法會。江戸淺草新島越〔名〕の念佛院にて行ひしもの、有名なき。

らいがく 來客〔名〕らいきやく〔來客〕に同じ。來格〔名〕格は、至る義。祭をするに當り、神靈の來り臨むこと。來至。人又は物事の來ること。

らいがく 來學〔名〕師家に通ひ來りて、學ぶこと。〔往教に對して〕

らいがく 來學期〔名〕この次の學期。

らいがく 來學年〔名〕この次に來るべき學年。

らいがく 雷瀬戸〔名〕地肥前國平戸〔名〕海峡の舊稱。

らいがく 來簡來翰〔名〕らいじやう來狀に同じ。

らいがく 雷氣〔名〕雷の鳴らんとする模様の古禮を編纂せるもの。四十九篇より成る。一名、小藏禮藏記。初、漢の武帝の時、河間の獻王、古典を採輯するに際し、禮儀に關する逸書多く出て二百十

四篇に達せしに、戴徳といふ者、削りて、八十五篇として、その甥戴聖、更に削りて、この書を成せり。戴徳のを、大戴禮〔名〕ともいふ。諸篇の作者は、一明かにするを得ず。四書の一なる中庸大學は、何れも、この書の一篇なるを、朱熹の單行せしめしなり。

らいがく 來儀〔名〕儀も來る義。來り到來いぎうたらう頼久太郎〔名〕らいさんやう〔頼山陽〕を見よ。

らいがく 頼病〔名〕病の原因たる細菌。結核菌に似て、桿狀をなす。

らいがく 來享〔名〕諸侯、又は屬國の使臣が、來朝して、方物を朝廷に獻ずること。來聘。

らいがく 來京〔名〕東京又は西京に來ること。來聘。

らいがく 頼杏坪〔名〕人藝州藩の儒者。名は惟柔、字は千棋、通稱は萬四郎。春水の弟。經學に精しく、詩及び書をよくし、藩の郡宰及び町奉行に任ぜられて、治績を擧ぐ。天保五年歿す。年七十九。明治四十二年、從四位を贈らる。

らいがく 來客〔名〕訪ひ來れる人。きやく。まらうど。らいがく。來賓。客來。

らいがく 來去〔名〕きやうい〔去來〕に同じ。

らいがく 雷魚〔名〕動はたはた〔雷〕にらいきらく禮義樂〔名〕ごじやうらう〔五常樂の異稱〕。

らいがく 雷嫌〔名〕雷鳴を忌み嫌ふこと。和合人〔大〕の應病の雷きらひ。

らいがく 來國次〔名〕人刀工。山城國の人。元和俊の人。

らいがく 來國俊〔名〕人刀工。〔初代〕世に、二葉國俊と稱す、山城國の人。文永頃の人。〔二代〕孫太郎と稱す。山城國の人。建武頃の人。

と。參會。

らいがく 磊塊磊砢〔名〕石のかたまり。胸中の平かならぬさまの譬。

らいがく 磊東〔名〕けはしく高大なるさま。

らいがく 雷光〔名〕てんくわう〔電光〕に同じ。

らいがく 頼光〔名〕人みなもどりみつ〔源頼光〕を見よ。

らいがく 四天王〔名〕人頼光〔名〕の禮等の大儀に、上下共、禮服〔名〕を着用して被り冠。漆地に製し、透刻の金輪を拵め、更に金銀珠玉の櫛を施し、前額上には、兜の前立物〔名〕に似たるものを立てたるもの。階位に依りて、飾に差あり。天皇のを冠冕。

女帝のを寶冠。親王以下諸臣五位以上のを玉冠。武官〔近衛の將、衛門の督等〕のを武禮冠〔名〕と呼びたり。支那唐の制を參酌して設定せしものにて、奈良朝の初期より、明治以前まで行はれたり。

らいがく 雷管〔名〕彈藥を炸發せしむるために、小銃に裝置する小き管。

らいがく 來觀〔名〕來りて觀ること。

らいがく 雷丸〔名〕竹林の土中に生じ、形、栗に似、固くして、重く、外黒くして、内白きもの。削りて、藥材とす。

らいがく 雷管劑〔名〕雷管に使用する藥劑。雷管を主とし、その他、雷管の爆發を適度に柔げ、もしくは爆發し易くし、或は熱を増加せしむるために、鹽酸加里、硝酸加里、粉末玻璃及び硫化アンチモン等を用ふ。

らいがく 雷鷄〔名〕動らいてう〔雷鳥〕に同じ。

らいがく 來詣〔名〕參詣に來ること。來詣。

らいがく 雷擊〔名〕雷の撃つが如しとの義。威の烈しきことの譬。雷てんげ〔電撃〕に同じ。



（んわくいら）

らいじやう 頼襄〔名〕「人」のいのほる(頼襄)に同じ。

らいしゅん 來春〔名〕次に來るべき春。いはる。明春。來陽。調算用。來春、女房們が參宮致す使儀。

らいしゅんすゐ 頼春水〔名〕「人」儒者。名は惟寛、字は千秋、通稱は彌太郎。山陽の父。安藝國竹原の人。大阪に出て、片山北海に學び、業成りて、子弟を教授せしが、後、尾張の二洲古賀精里等と共に、程朱の學を唱へ、藩の儒員となり、又幕府より昌平黌の教官を囑託せらる。文化十三年歿す。年七十一。大正四年、從四位を贈らる。

らいしよ 來書〔名〕らいじやう(來狀)に同じしよ。雷序來序〔名〕「能」にて、神聖莊重なる仕手、例へば、神主又は天狗などの進退する場合に用ふる囃子。芝居にて、人間に化けたる獸類の、急に本來の姿を現はす場合などに用ふる鳴物。

らいしよく 來囑〔名〕來りて頼むこと。來りて申しつくること。

らいす 禮す礼す〔動〕佐饗他。禮拜す。饗賓彼を禮し敬ふ〔英〕Offered Hooeの訛。〔名〕西洋料理の一。玉葱と小さく切りたる牛肉又は鶏肉とに、少量のカレー粉と、鹽麹粉とをまぜて煮、なほ馬鈴薯を磨り入れて、更に少し煮などしたる汁を、飯にかけたるもの。

らいすべえあ (英) Broomie) 良質の亞麻麻及び木綿織物を原料として製する薄き西洋紙。巻煙草を巻く料とし、又、花簪の簪などを造るに用ふ。

らいせ 來世〔名〕「佛」三世の一。死後、往きて生るといふ世界。あの世。後の世。後世(世)。未來世。こんよ。(前世)の現世に對して。

らいせい 來世〔名〕將來の世。後代。後世に對して。

らいせい 雷聲〔名〕雷の音。雷鳴。後世に對して。

らいせいもん 羅城門〔名〕らしやうもん(羅城門)の訛。宇治大納言物語「らいせい門

の邊にて、御輿をとめて」

らいせがね 來世金〔名〕冥福を祈りて、佛に捧ぐる金。夕霧阿波の鳴渡「あつたら金をあの世へ遣る。これが、ほんの來世金ぢや」

らいせき 磊石、礪石〔名〕高處より推し落す大石。太平記、輪賣の山を崩し、磊石の卵(卵)を壓すに異ならず。

らいせき 雷石〔名〕礪落雷のために、砂粒の溶解して、合成し、管狀をなしたるもの。

らいせつ 類節〔名〕「類」は絲の節の義。生絲(糸)に、瘤狀又は結狀を呈して生ずるもの。繭の質の不良、繰絲法の拙劣等に因りて生じ、その絲の強力、伸度を少くし、切斷し易からしむ。

らいぞく 來屬〔名〕來りて服屬すること。來服。來附。

らいぞん 來孫〔名〕「禮記」の祭法篇に「適來孫」とある條の陳澧の註に「方慈曰、玄孫之子爲來者、以其世數雖遠方來而未己也」と見え、釋名には「來孫、此在三無服之外、其意疎遠、呼之乃來也」とあり。玄孫の子。和名來孫。爾雅云、玄孫之子爲「來孫」、言、只有三往來親二耳。今按五代之孫也。

らいぞん 雷樽〔名〕支那古代の酒器。雲雷の模様を描きたるさかだる。

らいだ 懶惰〔名〕「らんだ」懶惰の誤讀。らいだう 禮堂、礼堂〔名〕寺院にて、本堂の前に在りて、本尊を禮拜する處。禮拜堂。轉讀し心細かりし夜な夜な陀羅尼(とらに)といふとく讀みつつ、らいだうにたらずむ法師あり。

らいだく 來宅〔名〕客のわが家に來る。らいだく 雷澤〔名〕「地」れきん(歷山)を見よ。史記の鄭玄の註に「在濟陰こと見ゆ」支那の古帝舜の、阜陵の時、漁したりといふ沼澤。歷山の附近なるべし。十訓、虞舜は、雷澤の漁夫なれども、後には、帝位にのぼり。

らいだん 來談〔名〕人の來りて、談話すること。來話。

らいち 畠地〔名〕「ち」(餘地)に同じ。大藏流莊當主松「松を植うる程のらいちがある」。

らいちん 雷碯〔名〕らいふせき(雷斧石)に同じ。

らいちんかうじつ 雷陳陳膝(句)「支那後漢の雷義が、茂才に擧げられしを、その友陳重に譲りし由、後漢書に見えたる故事に本づく」友情の厚き譬。

らいちやう 來聽〔名〕來りて聴くこと。

らいちやう 來場〔名〕その場所に來ること。

らいちやく 來著〔名〕たうちやく(到着)に同じ。

らいいつ 雷鑼〔名〕らいふせき(雷斧石)に同じ。

らいいつ 雷霆〔名〕かみなり。いかづち。雷庭〔名〕「王庭に來る義」に同じ。

らいいつ 雷鳥〔名〕「動」輪雞類に屬する鳥。高山に棲み、形、蝦夷山鳥(せえやまどり)に類し、兩眼の上に小形、赤色の肉冠あり。尾は長からず、脚は爪根まで羽毛を被る。羽毛は、夏は常に淡き黒き部分多けれども冬に至れば、白色に變ず。らいのとり。らいけい。いはとり。



らいしやう 來朝〔名〕「屬國又は外國の使臣が、來りて、朝廷に參内すること。來聘。來庭。外國人が、わが國に來ること。入朝。渡來。

らいしやう 禮殿、禮殿〔名〕はいてん(拜殿)に同じ。

らいしやう 雷電〔名〕かみなりと、いなづまと。雷鳴と電光と。雷曲の一。菅公、筑紫にて薨去ありし後、生前の師なりし法住坊のものと來りて頼まるる事あり、遂に、遺恨積りて、雷神となり、君邊の姦臣どもを取り殺さんとせしが、坊の法力によりて、祈り伏せられ、天満自在の勅號を賜はりて止むことを作れるもの。古名、菅丞相。

らいしやう 雷電〔名〕「人」らいてんためもん(雷電爲右衛門)に見よ。

らいしやう 來電〔名〕手元に届きたる電報。入電。

らいしやう 雷電桐〔名〕「桐」きざさばらいてんためもん。雷電爲右衛門。

らいしやう 雷電爲右衛門〔名〕「人」力士。姓は關氏。信濃國小縣(せいの)郡大石村の人。身長六尺五寸餘。江戸の力士浦風林右衛門の弟子となり、その技、天下に冠たり。文政九年歿す。年五十九。

らいしやう ライデン瓶〔名〕「理」れいてんびん。レイデン瓶に同じ。

らいしやう 雷同〔名〕「禮記」の曲禮篇に「母別説、母雷同」とあり、後漢書の桓譚傳の註に「雷之發聲、衆物同應。俗人無三是非之心、出言同者、謂之雷同」と見ゆ。何の考もなく、ただ、他の言ひ出でしことに同意すること。

らいしやう 雷同〔名〕「雷」の鳴り渡るが如くなる義。疊き立つこと。太平記、山門の大衆(だうしゆ)忿をなし、夜夜の蜂起、谷谷の雷動、休(む)む時無し。

らいしやう 來同〔名〕「詩經」の魯頌閟宮篇に「淮夷來同、莫不率從」とあり。來りあつまること。

らいしやう 未耨〔名〕「易經」の繫辭下傳に「耨耨之利、以教天下」とあり。耨(と)にてくさきり耕すること。

らいしやう 來納〔名〕來年の年貢を、前以て納めおくこと。庭園往來、來納過上准據。

らいしやう 雷難〔名〕雷に因る災難。

らいしやう 雷難除〔名〕らいしやう(雷除)に同じ。

らいしやう 癡人〔名〕らいじん(癡人)に同じ。

らいしやう 來年〔名〕次に來るべき年。來歲。明年。こんし。

來年の果報は、今年の稻で待つ「句」

今年の稻の豐作と不作によりて、來年の苦樂を祭するを得。「諺語」

來年の事を言ふと、鬼が笑ふ「句」

來年の事は、いかに成り行くべきか、豫想しがたし。「諺語」

らう老〔名〕老ゆること、又、老いたる人。『らうちやう(老丁)の略。』『人(人)らう(老子)の略。』『書(書)らう(老子)の略。』

老を謝す〔句〕『北史の尉元傳に謝(謝)老とあり。』次條に同じ。

老を告ぐ〔句〕『左傳の襄公七年の條に「韓獻子告老」とあり。』年老いたる旨を告げて、致仕を乞ふ。

らう勞〔名〕つとめ、いたづき、ほねをり、功勞、勞力、勤勞、苦勞、疲勞、勞。『年(年)のらう、數(数)はれる。』『勞(勞)を積む。』『練(練)ねんこう。』『勞(勞)をけしき、いとらうありて、なつかしき心ばへと見えて、人の心隔つべくも物したまはぬ人のさまなれば。』『練(練)世(世)歌(歌)などこそ、いとらうありて詠みたまふなれ。』使用し來れること。役に立ち來れること。『盤(盤)の片つかたに、しどけなく磨り平めかし、らう多きになりたるが。』

らうしやう(勞症)の略。

勞多くして、功少し〔句〕骨折りたる割合に、功果少し。『諺語』

らう牢〔名〕『罪人を押し籠めおく義にて、禁錮籠舎などの語あり。籠(籠)とのみいへるが、本來の語にて、後、牛馬を圍養する圍の意なる牢の字を借り用ふるに至れるなりといふ。』罪人を捕へて入れおく所。ひとや。牢屋。獄屋(獄)。牢獄。監獄。獄舎。牢舎。籠(籠)。諸國(諸國)はなと、獄河の牢舎残らず、京都の牢に引かるる事あり。』

らう郎〔名〕年若き男子。をとこ。妻より夫、又、情婦より情夫を指していふ語。『支那の官名の一。』『侍書郎』

らう廊〔名〕わたの(渡殿)に同じ。『源氏』

らう狼〔名〕『動(動)おほ(おほ)か(か)り(り)ぬ』

らう助動(助)らん(助)の音便。『源氏』

らう老〔接頭〕年老いてある意。『太平記』

「老皇帝は、形俄かに變じて、白色柔和の羊となる」

らう老〔接尾〕老人の名に添へて、敬意を示す語。『書(書)の門松』これは餘(余)の淨閑老

らう郎〔接尾〕男子の生れたる順序を示す數字に添へて用ふる語。『曾我五郎』

「八郎爲朝」

らう諒闇〔名〕らうあん(諒闇)の轉。『古語』

らうあるべければ、らうあだちたれど」

らうあう老黨〔名〕はんあう(晩黨)に同じ。

らうあう老嫗〔名〕らうは(老嫗)に同じ。

らうあがり牢上〔名〕牢獄より出づるを許されたること、又その人。出獄。

らうあん諒闇〔名〕りやうあん(諒闇)の約。『古語』

らうあらため牢改〔名〕らうないあらため(牢内改)に同じ。『なる醫者』

らういいう老醫〔名〕老年の醫師。又、老練

らういいう老優〔名〕老年の俳優。

らういいう浪遊〔名〕まんいいう(漫遊)に同じ。『老練なる俳優』

らういいう勞逸〔名〕ほねをりと安樂と、勞苦と安逸と。

らういん老陰〔名〕陰の氣極まりて、まさに陽に轉ぜんとするもの。(少陰に對して)大陰老陰、却つて、一陽の氣に催されて」

らういり牢入〔名〕牢獄に入れらるる

らういり老嫗〔名〕らうは(老嫗)に同じ。

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らういり朗詠〔名〕朗吟。『平安朝の中世に詠すること。朗吟。』

らうかは

を改めて、勤番せしものといふ、一部の奥
向番衆。若年寄の支配に属し、役料百俵
を給せられたり。
らうかはんがしら 廊下番頭(名) 徳川
幕府の職制の一。若年寄の支配の下に、
廊下番を統轄せしもの。定員、初は二人、
後四人。役料五百俵。

らうかはんくみかじら 廊下番組頭(名)
徳川幕府の職制の一。廊下番の組頭。若
年寄の支配に属したり。

らうがへ 牢替(名) 囚人を、一の牢獄よ
り、他の牢獄に移すこと。

らうかん 牢監(名) 牢(牢)に同じ。

らうかん 琅玕(名) 玉(鑽) 碧玉に似た
支那産の美しき石。 青青と美しき
竹の異稱。

らうかん 老漢(名) 老年の男。

らうかん 老幹(名) 老木の幹。 「顔」

らうかん 老顔(名) 老者の顔。老衰せる

らうかん 老眼(名) 老者の眼。老衰せ
る眼力。老視の目。

らうかん 老眼鏡(名) まんがんきや
う(遠眼鏡)に同じ。

らうき 老耆(名) きらう(耆老)に同じ。

らうき 老驥(名) 老年のよき
馬。 老年の俊傑の譽。

老驥 千里を思ふ(句) 次條に同じ。

「諺語」 太平記「已に老衰して、その選に
當らず、……只、老驥の千里を思ふ心、
未だ屈せざれども」

老驥(也)に伏すとも、志、千里に在
り(句) 支那の魏の武帝の樂歌に
「老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心
未已」とあり、有爲の人の、老年に至
り、不遇の地位に在りながらも、英氣の
衰へぬ聲。 「諺語」

らうき 老氣(名) 年舊りたる者の氣魄。

老氣、秋に横たはる(句) 杜甫の詩
句「子雖一羈、老氣橫九州」と北山
移文の「霜氣橫秋」とを合はせていへ
る語、人の氣概の凡ならざる形容。

らうき 勞氣 勞氣(名) らうきやう(勞症)

らうき

らうき 牢記(名) きやうき(強記)に同じ。

らうき 老妓(名) 老年の藝妓又は娼妓。

らうきやう 老朽(名) 老いて役に立たぬ
こと、又その人。老廢。

らうきやう 老牛(名) 老いたる牛。

老牛、轡を低(下)り、牝虎、子を含む
「句」 事類全書に見ゆ、親が子を愛する
情の譬。 「諺語」 盛衰記「親子(之)恩愛の
道は、老牛轡を低り、牝虎子を含む志」

らうきく 老菊(句) 花の盛りを過ぎた
る菊。 「貨銀」

らうきん 勞銀(名) 勞働して得る金銭。

らうきん 朗吟(名) ほがらかに詩歌を
吟咏すること。朗詠。

らうきんききんせつ 勞銀基金説(名)
「經」 ちんきんききんせつ(貨銀基金説)に
同じ。

らうきんてそく 勞銀鐵則(名) 「經」
ちんきんてそく(貨銀鐵則)に同じ。

らうきやう 老痴(名) らうか(老痴)の説。

らうきやう 老狂(名) 年老いて、常軌に
外れたる振舞をなすこと。 盛衰記「父入道
老狂の餘、便(な)き事をのみ振舞ひ候ひ
し上」

らうきやう 老境(名) 年老いたる身の

らうきやう 老脚(名) 老人の脚力。とし
よりのあゆみ。老足。 「ること」

らうきやう 老窮(名) 年老いて困窮す

らうきやう 老魚(名) すなどり。 いさり。
漁撈。

らうきよく 浪曲(名) なにはおし(浪花節)

らうきやう 牢祇王(名) らうきやう(龍祇
王)を見よ。 「よ」

らうき 老苦(名) 佛(し)く(四苦)を見

らうき 老軀(名) らうたい(老體)に同じ。

らうき 老屈(名) 年老いてかがむこ
と。 運彩色葉集「老屈、ラウクツ」 「ね」
らうきくつめき 廊脊脱(名) 古、中門より
廊(へ)の上り口に設けし沓脱所。
らうくん 郎君(名) らう(郎) 郎の敬稱。

らうくわ

らうくん 老君(名) 臣下が、大名の隠
居せし者を指していふ語。 二(人)らうし
(老子)の敬稱。

らうくん 老軍(名) 老功の軍士。ふるつ
はもの。 東鑑「明曉可、攻、擊、泰、衡、先、陣」之
由、二品内内被仰、合于老軍等、

らうくんし 郎君子(名) 雅樂の一。平
調(へい)の唐樂にて、唐にては、男子誕生
の時に奏し、我國にては、上皇賀壽の日、
退出音聲(でしゅおんせい)に用ひたりといふ。 「老
君子」 「動」すかひ(酢貝)の漢名。

らうくわ 浪華浪花(名) 浪の碎けて、
立つ白き沫。 なみのはな。 「じ」

らうくわ 狼火(名) らうえん(狼煙)に同
じ。

らうくわ 浪華(名) 「地」なには(浪華)に
同じ。 「き」

らうくわい 老檜(名) 老木の木のひの

らうくわい 老槐(名) 老木のまんじゆ。

らうくわい 老獺(名) らうかつ(老黠)に
同じ。

らうくわつ 老猾(名) 前條に同じ。

らうくわつ 老氣(名) 老いて病むこと。 とし
やみ。 老病。 一説には、勞氣にて、單に所
勞病氣の意なりと。 「古語」 源氏「母の尼
の、らうげ、俄かに起りて」

らうげ 勞氣(名) 前條を見よ。

らうけい 老兄(名) 年老いたる兄。

らうけい 老兄(代) 年長の友に對する
第二人稱の敬稱。

らうげつ 朗月(名) ほがらかなる月。 澄
みわたりたる月。 「に同じ」

らうげばう 狼牙棒(名) そがらみ(袖搦)

らうけん 老健(名) 年老いて、身體の
すこやかなること。 日文章などの、老練
にして、強き氣象の現れてあること。

らうこ 老狐(名) 老いたる狐。 ふるぎつ

らうこ 老虎(名) 老いたる虎。 「ね」

らうこ 狼虎(名) こらう(虎狼)に同じ。

らうこ 狼顧(名) 戰國策に「秦雖、
欲深入、一則狼顧、恐、韓、魏、之、議、其、後、也」
とあり、本草綱目に「李時珍云、狼性善顧
而戻踐躑」と見ゆ、心常に危ぶみ懼れて、

らうく

返りみがちに、落ちつかぬこと。 三晉
書の宣帝紀に「聞、有、二、狼、顧、之、相、欲、除、
之、乃、召、使、善、行、令、三、反、顧、而、正、向、後、而、身、
不、動」とあり、中井履軒の史記雜題に「狼
善顧、身正向前、而頭正向后也」と見ゆ、
身は前方に向ひながら、首のみを正しく
後方に向くこと。

らうこ 牢固(名) けんご(堅固)に同じ。

らうこ 牢平(貌) しつかと。 かたく。

らうこ 老後(名) 年おいたるのち。 おい
さき。

らうこ 浪語(名) まんげん(漫言)に同じ。

らうこ 老功(名) 年來の熟練。 年の
功。 らうれん。 胸算用、老功の神達……そ
れぞれに神役分けて」

らうこく 牢獄(名) らう(牢)に同じ。

らうこく 牢輿(名) 昔、囚人を護送す
るに用ひし輿。

らうこく 牢御所(名) らうご(じ)やう(牢
御所)に同じ。

らうご 老耄(名) らうしや(老耄)の約轉。
「古語」 大鏡、いと興ある事いふらうごた
ちかな」

らうさい 老歲(名) らうねん(老年)に同
じ。

らうさい 老妻(名) 老年のつま。

らうさい 勞瘵(名) らうしやう
(勞瘵)に同じ。 三代男、下に焦るる思、火
動となつて、瘵瘵に身を苦しめ」 日次條
に同じ。

らうさい 勞瘵氣(名) 勞瘵の
氣味。 三代男、瘵瘵氣の娘」

らうさい 朗細節(名) 朗細節、瘵瘵節(名) らう
さい(弄齋節)に同じ。

らうさい 老壯(名) 年寄と、若き者と。
老人と、壯者と。

らうさい 老蒼(名) 年老いて、毛髮の青
白くなること、又その人。 「と。 莊老。

らうさい 老莊(名) 老子と、莊子
の學派。 虛無と無爲とを標識とす。

らうさい 狼瘡(名) 一種の皮膚病。 結核
菌の直接作用によりて、紅褐色の局面を
呈し、幼時より發して、終生、慢性的に進

をあらわ ゐるるりら よゆや もめんむかま ほへふひは のねねにな とてつちた そせすしざ こけきか おえういあ

わさ

には、敵の歩兵の潜伏を妨ぐるために、何れも、矢りたる杭を植立したる副防禦。敵の遠見を避け、従ひて、砲撃に依る破壊を蒙ること少きため、材料に乏しき要塞に用ふるに適す。

らうせい 老生「名」老いたる書生。

らうせい 老生「代」老人の第一人稱。

らうせい 老成人「名」老成人なる人。

らうせい 老小「名」老人と小兒と。

らうせい 老少「名」老人と少年と。

老少不定「句」『佛』『歡心略要集』に「世人之愚也、於老少不定之境、成千秋萬歳之執」とあり。人の命数は、定まりなきものにて、老いたるも、若きも、死期はかり難し。『諺語』平家老少不定の境なれば、年の若きを頼むべきにあらず。

らうせうねん 老少年「名」「植」はげさ(葉)雞頭の異稱。

らうぜき 狼藉「名」『狼の草などを藉(しき)ちらして、その上に寝ぬるに譬へていふ』。『物』の入り亂れたること。とりちらしてあること。『みだりに他を犯すこと。理不盡なる事すること。亂暴。盛衰記、義仲、都にて、狼藉、斜ならず』。

らうぜき 狼藉人「名」次條に同じ。

あゝ狼藉人を打留め候へ」

らうぜきもの 狼藉者「名」狼藉の所行ある者。亂暴人。

らうぜつ 浪説「名」てたらめなる話。流行ある者。亂暴人。

らうぜん 朗然「貌」らうらう(朗朗)に同じ。

らうせんせい 老先生「名」らうし(老師)に同じ。

らうそ 老鼠「名」老いたる鼠。

らうそ 老鼠「名」『動からり(蝙蝠)の異稱。』

らうそ 老鼠「名」『その子蘇軾(大蘇といふ)と蘇軾(小蘇といふ)とに對していふ』。『名』(蘇洵)の異稱。

らうそ 老鼠「名」『濫俗の訛といふ』。『た(穢多)に同じ。』

らうそ 老僧「名」老年の僧。

わさ

らうそ 老叟「名」老年の男。老翁。

らうそ 老足「名」らうそ(老脚)に同じ。『舊の脚、損者、毎日、老足を運ぶも、典次兵衛氣遣(きぢき)』。諸國はなし、老足の山路ざりとは難儀なり。

らうそ 老賊「名」老年の賊。

らうそ 老措大「名」らうし(老書生)に同じ。

らうたい 老體「名」老人のからだ。老軀。老身。胸算用、命の入日傾く老體也。後世の事は忘れて。

らうたい 老態「名」年老いたる容態。

らうたい 老大「名」少壯の時期を經過したること。年とること。

らうたい 老大徒に悲傷す「句」『少壯努力せずんば、老大徒に悲傷せん』を見よ。

らうたい 老臺「名」年長の人を指していふ語。『書簡文の語』。『鼓』を見よ。

らうたい 牢太鼓「名」らうたい(籠太鼓)に同じ。『老太鼓』。隆盛の期を經過して、國勢の振はずなりたる大國。

らうたい 老大人「名」老いたる男子の敬稱。『他人の老いたる父の敬稱。』

らうたい 琅璫銀鐺「名」罪人をつなぐ

らうたい 潦倒「名」『北魏書の崔暉傳に「魏天保以後、重吏事、謂容止溫藉者、爲潦倒。暉遂不改」とあり。』。『こせつかぬこと。藉藉』。『待康の絶交書に「足下舊知吾潦倒、疎不切事情」とあり。』おぢれたること。

らうたい 黃宏「名」植はしり(黄宏)の漢名。

らうたい 郎黨「名」らうざ(郎等)に同じ。

らうたい 莫宏越幾斯「名」莫宏根の粗末に稀酒精と常水とを加へ、冷浸、壓濾、濾過、蒸發の手續を経て、稠厚なる越幾斯としたるもの。褐色を呈し、鎮痛、鎮痙の効あり。

らうたい 莫宏根「名」莫宏根(モウコウ)の根莖を乾燥して、鎮痛、鎮痙の藥用に供するもの。

わさ

らうたい 莫宏坐藥「名」莫宏越幾斯にカカオ脂を加へ、肛門坐藥として、鎮痛の用に供するもの。

らうたい 莫宏丁錢「名」莫宏根のチンキ。用途は莫宏越幾斯に同じ。

らうたい 莫宏軟膏「名」莫宏越幾斯を材料としたる軟膏。鎮痛、鎮痙の目的を以て、神經痛及びレウマチス等に塗布す。

らうたい 莫宏三位の君「名」はゆがる。『古語』。源氏右近は、何の人か、なほ、そのかたみ見たまひて、らうたいものにのぼしたれば。

らうたい 浪宅「名」浪人の住宅。

らうたい 羅字竹、喇字竹「名」らうたい(羅字竹)に同じ。『形』かはゆらし。あいらし。したはし。『古語』。源氏右近は、何の人か、なほ、そのかたみ見たまひて、らうたいものにのぼしたれば。

らうたい 老聃「名」(人)支那周の苦縣の人。姓は李、名は耳、聃はその字、又の字は伯陽、周の帝室圖書館の官吏。孔子、周に至りし時、禮を問ひ、その人格に傾倒せりといふ。老子二卷を著し、無爲自然の教を述べ、終る所を知らざれども、その子孫に、西漢の初、膠西王の太傅たりし者あり。又、その學說、後に道教となりて、宗教化するに及び、種種の傳説附加せらるるに至れり。尊びて、老子と、入牢中に、牢溜「名」徳川時代に、入牢中の病人を移しおきし所。

らうたい 老竹「名」年經たる竹。

らうたい 勞帳「名」古、官吏の姓名を列記し、任官の初年を書き加へおきて、奉公の年數を知る料とせるもの。江次、先取、内堅、勞帳、任之。次、讀申。次、取、勞帳、上懸、勾、次、寄物者、點(所任之官。以下作法皆同)。建武年中、行年十一日より、縣召(の)の除目行はる。……さて、内堅所の勞帳を取りて、次第にこれを任ず。

らうたい 牢帳「名」徳川時代に入牢者の姓名等を記入しおきし帳簿。

らうたい 老丁「名」大賚の制度にて、

わさ

六十一歳乃至六十五歳、孝謙天皇の天平寶字二年以後は六十六歳乃至六十四歳の男子の丁役に服すべきもの。(正丁(せいてい)次丁(じてい)少丁(せうてい)参照)

らうたい 老丁「名」老丁の、殘疾に罹れるもの。調庸を全免す。老殘。

らうたい 老丁帳「名」大帳枝文(の)の。老丁に關する事項を記入せしもの。

らうたい 老中「名」徳川幕府の職制の一。將軍に直屬して、政務を總理し、兼ねて諸大名、及び幕府の職員中、樞要なるものを直轄せしもの。定員は、四人或は五人。二萬五千石以上の譜代城主を補し、祿高これに満たざる者、又、城主ならざる場合は、足高(の)を給し、又、城主格に准じて、官位、初は五位に過ぎざりしが、後には、四位の侍從に拜せり。執務する所を御用部屋といひ、月番にて、交替して事を行ひ、大事は全員にて合議し、大老缺けたる場合には、首席の老中、全員を總轄せり。又、別に、將軍世嗣の事務を總轄せし西丸老中一人あり、又、前將軍ある場合には、大御所様附老中一人を置きしことあり。

らうたい 老中格「名」徳川幕府の職制の一。老中の定員以外にして、その職務に參與せしもの。資格、待遇は老中に准ぜられ、その末席に列し、月番加判には與らず、二年を経て、老中に進むを常としたり。松平信綱始めてこれに任ぜられたり。老中並。

らうたい 老中並「名」前條に同じ。

らうたい 老女「名」老年の女。『らうち(老女)を見よ。』

らうたい 牢手形「名」徳川時代に、出獄者の交付せられし許可證。

らうたい 老臺「名」『臺は七十歳(一説には八十歳の義)老いばれてあること、又その人。老臺(の)耄老。

らうたい 朗徹「名」すきとほりて見ゆること。

らうにんいしや 浪人醫者・牢人醫者
 【名】徳川時代に、浪人^①にして、醫を職

らうにん

とせし者。

らうにんがわき 浪人乾牢人乾「名」
浪人「名」の平生貧窮なるがために、食を得れば、多量に食すること。平生諸事缺乏の間に生活する者の、欲し求むる心の切なることの譬。

らうにんさむらひ 浪人侍牢人侍「名」
浪人なるさむらひ。堀山駕浪人侍と口論し。

らうにんじゅう 浪人衆牢人衆「名」
川時代、元よりの藩地を離れて、他藩に仕へし者。

らうにんずみ 浪人住牢人住「名」
人となりて住ふこと。

らうにんせんき 浪人詮議牢人詮議「名」
「名」らうにんあらため「浪人改」に同じ。

らうにんひがみ 浪人僻牢人僻「名」
浪人に有りがちなひがみ根性。風俗変遷無名氏とは見えはれど、身は、雲水のたよりなき浪人ひがみとぞ覺えける。

らうにんぶん 浪人分牢人分「名」
浪人たる身分。武家諸物諸儀具藤介といひて、これも牢人分なり。

らうにんもの 浪人者牢人者「名」
にん「浪人」に同じ。若鳥、附甲斐も無き牢人ものを、人と思し召され、近頃有りがたく候。

らうにんやしき 浪人屋敷牢人屋敷「名」
浪人の住める屋敷。若鳥、附甲斐屋敷へ忍び来て、盡の禮儀正しく述べて。

らうにんや 老若「名」
らうじやへ「老若」に同じ。老中と、若年寄との稱。「徳川時代の語」。

らうにんよ 老女「名」
らうぢよ老女「名」に同じ。大寶令の制度にて、老丁「名」と同じ年齢の女。

らうにんぬ 牢拔牢脱「名」
らうやぶり「牢」らうねん 老年「名」
年老いたること。老齡。類語。

らうにんじや 老年者「名」
老年の人。老らうのう 老農「名」
老功の農民。農業上に經驗を積める人。

らうのう

らうのう 勞農「名」
農働者と農夫と。

らうのうじゆき 勞農主義「名」
貴族僧侶等の專權を排し、勞働者と農夫との利權の擁護を目的として、政治を行はんとする主義。

らうのうせいふ 勞農政府「名」
勞農主義に依りて立てる政府。そびえつと政府。

らうのうぢや 勞農露西亞「名」
勞農政府の支配に屬する露西亞、即ち、西曆一九一七年、同國革命勃發後、レニーン「名」(Leon Lenin)と、トロツキイ「名」(Alex.under Trotsky)と相携へ、アレクシエフ「名」(Alex.under Tsar)の社會革命黨の政府を倒して後の、現政府治下の露西亞。

らうのうごじよ 牢御所「名」
貴人を押し籠め、番人を置きて、警固せしめし建物。平清盛の、攝津國福原に近き、淡川の西なる夢野に造りて、後白河法皇を幽し奉りしもの、有名なり。平家入道相國は、高倉の宮御謀叛によりて、輩などは、牢の御所とぞ申しける。

らうのふ 老納「名」
らうそう「老僧」に同じ。

らうのふ 老婆「名」
老年の女。ばばあ。らうな。老嫗「名」
老嫗「名」。

らうのふ 老馬「名」
老いたる馬。老馬の智「名」
古、支那齊の桓公が、孤竹國を伐ちて、歸途、雪中に道を失ひしが、時に、軍に従へる管仲、老馬を放ちて、その後に従ひ行きて、遂に道を發見せりといふ故事。「韓非子の説林篇に見ゆ」。

らうのふ 老輩「名」
老人たち。老いたる人々。

らうのふ 老嫗「名」
らうする「老妻」に同じ。

らうのふ 老廢「名」
年老いて、役に立たぬこと。老朽。「名」
物の、古びて、用を爲さぬこと。

らうのふ 老梅「名」
老木の梅。「名」
「香の一。沈」の一種。

らうのふ 狼狽「名」
「西陽雜俎」に「或言、狼狽は兩物、狼前足絶短、毎行、常駕於

狼前足絶短、毎行、常駕於

らうのう

狼狽上。狼失狼則不能動。故世言三事乖者、稱三狼狽、集韻に「狼、獸名、狼屬、生子或缺一足、三足者、相附行、離則顛、故俗遂謂三之狼狽」とあれども、詩經に「狼跋其胡」とある跋は「跟」と音義相通じ「跟」を「狼」の字の影響にて、「狼」と書くに至りしより、前記の如き附會の説を生ずるに至りしなるべしといふ。急遽にして、措置を失ふこと。あわて騒ぐこと。

らうのういほけん 老廢保險「名」
「商」生命保險の一種。老いて、一定の年齢に達し、又は労働能力減少した場合に、一定の金額を支拂ふ契約のもの。

らうのうばう 老蚌「名」
老いたるど貝。老蚌、珠を生む「名」
「三輔決錄」に「韋康字元將、弟誕字仲將、孔融與三其父書曰、前日元將、昨來、洞房亮茂、雅度宏毅、偉世之器也、昨日仲將、來、文敏篤誠、保家之主也、不意雙珠近生、文敏篤誠、保家書の隨叩傳に「邪劫謂其父曰、吾以卿老蚌遂出明珠」とあり「葦が鷹を生む」に同じ。「諺語」。

らうのう 老蚌の珠「名」
老後に擧げたる、よき子。

らうのう 老蚌、明珠を出す「名」
前前條に同じ。

らうのう 老博士「名」
老いたる博士。

らうのう 老柏「名」
老木の柏。

らうのう 老妾心切「名」
次條の略。

らうのう 老妾心切「名」
「傳燈錄」に「臨濟自黃檗、往參大愚、述三度被、打話。愚曰、黃檗與老妾心切、又、黃檗云、汝迴太速生、師云、祇爲老妾心切」とあり「心ぞへ。親切すぎたる心ぞへ。親切すぎたる心ぞへ。親切すぎたる心ぞへ」。

らうのう 勞煩「名」
はらう「煩勞」に同じ。

らうのう 牢番「名」
らうやばん「牢番番」に同じ。諸藩は、御身の事御訴訟申さんと、牢番を頼み。

らうのう 牢番同心「名」
らうやばん「牢番同心」に同じ。

らうのう 牢拂「名」
徳川時代に、牢屋

徳川時代に、牢屋

らうのう

の近邊又は牢内より出火したる時、又は佛事などのために、牢内の囚人を、悉く解放せしこと。出火の場合には、三日以内に、歸り來らしむるを法とし、歸り來らざりし者は、更に、重科に處せられたり。一代、御法事につき、諸國の牢拂。ありがたや、あふなきこの身をのがれて。

らうのう 老婢「名」
老年の下婢。

らうのう 勞費「名」
勞力と費用と。

らうのう 浪費「名」
あてなしに金錢を費すこと。むだづかひ。

らうのう 老比丘「名」
老年の比丘。釋尊「名」
老比丘、うづけたる仲間に向ひ。

らうのう 浪費者「名」
浪費する人。財産を消費する者。準禁治産者として、保佐人を附することを得。

らうのう 牢櫃「名」
らう「牢」に同じ。冥途の飛脚詮議に逢うて、牢びつ、細かかるといふ「飛」(飛花五大丸)こなた故に、この家主は、牢櫃へはひつて。

らうのう 老病「名」
老衰のための病。

らうのう 老父「名」
老年のちち。

らうのう 老夫「名」
老年の男。おやぢ。老翁。

らうのう 老婦「名」
老年の女。ばばあ。老嫗。

らうのう 老夫「代」
老年の男の自稱。

らうのう 廊廡「名」
わたの。らうか。

らうのう 牢奉行「名」
らうやぶ「牢奉行」に同じ。「ふる食物」。

一七年、露國の革命に、トロツキイ(Leon Trotsky)の率ゐたる、労働者と兵士との聯合同盟の團體。同國革命の核心なり。

らうへう 廊廟(名) べうらう(廟廊)に同じ。

らうへん 良辨(名) 華人、華嚴宗の僧。俗姓は百濟(百濟)とも漢部とも漢部ともいひ、生國も、相模とも近江ともいひ、詳かならず。幼時、梵にさらはれて、大和國春日の社頭に落されしを、義淵に拾はれ、やや長じて、學問、道德を以て知らる。後、聖武天皇の知遇を得、東大寺の經管に興り、別當より累進して、僧正となる。寶龜四年寂す。年八十五。東大寺の外、近江國の石山寺も、その造營に係る。「りやうべん」ともいふ。

らうへん 老圃(名) 蔬菜を作る老農。
らうへん 老鋪老舖(名) 數代に亘りて營業し來りたる商店。しにせ。
らうへん 老母(名) 老年のはは。
らうへん 老僕(名) 老年のしもべ。
らうへん 老木(名) 年ふりたる樹木。老樹。古木。
らうまい 糧米(名) りやうまい(糧米)に同じ。著聞齋持(科)の糧米。「じ」。

らうまい 老味(名) りやうまい(老味)に同じ。
らうまい 糧米(名) こめひつ(米糧)を云ふ。陸前國仙臺の方言。
らうまい 老邁(名) 老は七十歳(一説には八十歳又は九十歳の義)老いばれてあること。又その人。らうばう。らうもう。老耄(名)。曾我わが父九十にして、老耄極りなし。

らうまう 老耄(名) 老耄性痴呆(名) 老年者に發生する、一種の精神病。記憶力、理解力の減退不良を、主たる徴候とす。
らうむ 勞務(名) 労働の事務。
らうむ けおひ けおひ 勞務受負業(名) りやうむ けおひ けおひ 勞務受負業(名)に同じ。

らうむ かぶ 勞務株(名) 商勞務出資の株式。我國の商法にては、この種の株式を認めず。
らうむ じや 勞務者(名) 勞務に従事する者。に同じ。舊曲(名) 老武者とて、人々に侮られんも、口惜しかるべし。

らうむ じゆつ 勞務出資(名) 勞務を、會社又は組合の出資の目的とする(資本出資、信用出資に對して)。
らうむ じゆつ じや 勞務出資社員(名) 商勞務出資の社員。「じ」。

らうめい 朗明(名) りやうめい(朗明)に同じ。
らうめい 糧物(名) りやうめい(糧米)に同じ。盛衰國の土産、道の糧物にも所望したまへかし。
らうもん 勞問(名) 勞(名) ひ問ふこと。
らうもん 羅字屋 喇字屋(名) りやうもん(羅字屋)に同じ。

らうや 牢屋(名) りやう(牢)に同じ。
らうや 老爺(名) 老年の男。おやぢ。老夫。他人の父の敬稱。
らうや がかり 牢屋係(名) りやうやくにん(牢役人)に同じ。
らうやく 良藥(名) りやうやく(良藥)に同じ。御伽草紙に「良藥の妙管めたまふに」。

らうやく 良藥(名) 良藥の妙管めたまふに。良藥、口に苦し。良藥(名) 口に苦し。忠言、耳に逆ふ。
らうやくにん 牢役人(名) 牢獄をまもる人。獄吏。
らうや げなん 牢屋下男(名) 牢屋奉行に屬して、囚人の飲食の世話、牢内の監督などに従事せしもの。牢屋番。

らうや ぶぎやう 牢屋奉行(名) 徳川幕府の職制の一。町奉行の支配に屬して、牢屋に關する事を總轄せしもの。同心、これに附屬したり。牢屋奉。囚獄。
らうや ぶ 牢破(名) 囚人の、牢を破りて逃げ去ること。又その囚人。破獄。脱獄。

らうやう 老雄(名) 老年の英雄。
らうやう 勞來勞休(名) 孟子の滕文公篇に「放勳曰、勞之來之、漢書の游俠傳に「往至喪家、爲棺槨、勞休畢」とあり。來(勞)ふこと。

らうらい 老萊子(名) 來は助字。年寄る時代の高士。楚の人。孔子と同時代といふ。世亂を避けて、蒙山の陽に耕し、儉素自ら奉ず。親に事へて孝。年七十二にして、その父母、なほ生存せしに、身に五色の衣を着け、嬰兒の遊戲をなし、伴り蹠ぎて、地に倒れ、小兒の啼聲をなして、父母の喜ばんことを欲したり。書十五篇を著して、道家流の論をなせりといふ。
らうらい 浪浪牢浪(名) りやうらい(流浪)に同じ。梅松園、牢浪仕り候うて。

らうらい 老老(名) 甚しく老いたるさま。盛衰、景家が母、老老として、庭に杖突き、走り出て。
らうらい 勞勞(名) 疲れてあるさま。きのふはけふの物語「顔色も衰へ、らうらうしたる人」。

らうらい 琅琅(名) 玉石又は金の鳴る音の形容。鳥の啼聲の形容。
らうらい 勞勞(名) 老老(名) 勞は功勞の意。世事に馴れたり。おちつきとおとなし。りやうらやうじ。「古語」。

らうらい 老老(名) 老いて、物のうきこらうり 老老(名) 老年の官吏。老功の官吏。
らうらい 老龍(名) 年を経たる龍。らうらい 勞力(名) 力を勞すること。ほねをり。らうどう。經(名) りやうよく けおひ けおひ 勞力請負業(名) りやうどうしや けおひ けおひ 勞力請負業(名)に同じ。

らうらい 勞力者(名) りやうどうしや(勞力者)に同じ。
らうらい 勞力者(名) 勞力的機械(名) 勞力者の熱練に代はる機械。例へば、織物機械、紡績機械など。

らうらい 老淚(名) 年老いて、腕く落つる涙。老の涙。
らうらい 老羸(名) 年老いて衰へよわること。平家老羸の身を以て、妄に蜂起の亂をなす。

らうらい 老齡(名) りやうらい(老年)に同じ。
らうらい 狼戾(名) 恣深くして、理に戾すること。食戾。狼戾として、數多きこと。亂れ散ること。「粒米、狼戾」。太平記「公家のは、日を逐ひて狼戾せしかば、朝議悉く廢絶して」。

らうらい 糧料(名) りやうまい(糧米)に同じ。平家、糧料買うて、奥州の方へ落ちまどひ。曾我、糧料持つ者、四五人召具し。

らうらい 老練(名) 久しく經驗を積み、なれて巧みなること。老練。熟練。

らうらい 老練家(名) 老練なる人。

らうらい 牢籠(名) 淮南子の本經訓篇に「牢太一者、牢籠天地、唐の玄宗の詩に「英髦既包括、豪傑自牢籠」とあり。獸を牢に、鳥を籠に押しこむる如くする義。一まとめに取り込むこと。手の内にまめ込むこと。籠絡。苦しむこと。なやむこと。平家、佛法の衰微、王法の牢籠、正にこの時に當れり。盛衰記「頼朝こそ、朝家の御教、天下の牢籠を承りて」。

らうらい 牢落(名) りやうらく(寥落)に同じ。
らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうらい 老辣(名) 老いて、心のきびし

らうろ

らうろせらすす【名】「植」薔薇科に属する常緑灌木。高さ一丈内外、葉は楕圓形にして、鋸齒あり、質厚くして、光澤を具ふ。小形の花、總狀花序をなして開く。地中海沿岸に自生す。葉を蒸溜して、ラウロセラスス水を探る。

らうろ

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。らうろ【名】「老」老年の男。おきな。老爺。

らかい

らかい【名】螺旋状に構へたる階段。西洋建築に多し。略。

らかん【名】「佛」あらかん(阿羅漢)の五百の羅漢【句】「佛」ひやうくわん(五百羅漢)に同じ。紫雲五百の羅漢、紅の涙を流しき。

らかん【名】「漢」漢の廣東番禺の縣を、そのまゝ、鹽、硝石、砂糖などを混和したる水の煮立てて冷したる中に漬けおき、後水に漬けて、鹽分を去りたる上、火烟に煙へたるもの。

らかん【名】「佛」あらかん(阿羅漢)の五百の羅漢【句】「佛」ひやうくわん(五百羅漢)に同じ。紫雲五百の羅漢、紅の涙を流しき。

らかん【名】「漢」漢の廣東番禺の縣を、そのまゝ、鹽、硝石、砂糖などを混和したる水の煮立てて冷したる中に漬けおき、後水に漬けて、鹽分を去りたる上、火烟に煙へたるもの。

らかん【名】「佛」あらかん(阿羅漢)の五百の羅漢【句】「佛」ひやうくわん(五百羅漢)に同じ。紫雲五百の羅漢、紅の涙を流しき。

らかん【名】「漢」漢の廣東番禺の縣を、そのまゝ、鹽、硝石、砂糖などを混和したる水の煮立てて冷したる中に漬けおき、後水に漬けて、鹽分を去りたる上、火烟に煙へたるもの。

らかん【名】「佛」あらかん(阿羅漢)の五百の羅漢【句】「佛」ひやうくわん(五百羅漢)に同じ。紫雲五百の羅漢、紅の涙を流しき。

らかん【名】「漢」漢の廣東番禺の縣を、そのまゝ、鹽、硝石、砂糖などを混和したる水の煮立てて冷したる中に漬けおき、後水に漬けて、鹽分を去りたる上、火烟に煙へたるもの。

らかん【名】「佛」あらかん(阿羅漢)の五百の羅漢【句】「佛」ひやうくわん(五百羅漢)に同じ。紫雲五百の羅漢、紅の涙を流しき。

らかん【名】「漢」漢の廣東番禺の縣を、そのまゝ、鹽、硝石、砂糖などを混和したる水の煮立てて冷したる中に漬けおき、後水に漬けて、鹽分を去りたる上、火烟に煙へたるもの。

らかん【名】「佛」あらかん(阿羅漢)の五百の羅漢【句】「佛」ひやうくわん(五百羅漢)に同じ。紫雲五百の羅漢、紅の涙を流しき。

らかん【名】「漢」漢の廣東番禺の縣を、そのまゝ、鹽、硝石、砂糖などを混和したる水の煮立てて冷したる中に漬けおき、後水に漬けて、鹽分を去りたる上、火烟に煙へたるもの。

らきり

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らきり【名】「羅」を「羅」を見よ。陰莖を断ち切る事、又それを断ち切りたる人。和漢三才圖會、閨人、俗云「羅切」。

らくい

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

らくい【名】「洛陽」雒陽【名】「地」らくやう(洛陽)を見よ。

舞衣(色衣記)「一色亭の名に呼べるは、
膝王閣の趣なりとや。落霞、孤鶩と齊
しく飛び」

らくか 落下 [名] 落ちくだること。

落下の定律 [句] [理] 『英』 falling 眞空内に於ては、如何なる物
體も、同速度を以て落下し、又、物體の
落下に要する時間の平方は、その距離
に比例し、落下の速度は、その距離の平
方根に比例し、又、每一秒間に落下する
距離は、一・三・五・七・九等の割合にて増
加すといふ、物體落下の速度と距離と
時間とに關する定律、落體の定律。

らくか 落下傘 [名] うちかさん 落下
傘に同じ。

らくか 落書・樂書 [名] らくしよ (落
書の重箱讀) 門・壁などに、いた
づらに書きちらすこと、又その書きちら
したるもの。いたづらがき。むだがき。
らくしゆ。漫題。

らくか 落角 [名] 『英』 Angle of fall
拋物線狀を描き落下する物體の、終末
に通過する連線の切線が、水平との間に
形づくる角。

らくか 洛學 [名] 支那宋學の一派。
程顥(ひで)程頤(ひで)兄弟の學派。性命
理氣の説を主とす。程頤の門下に楊時あ
り、朱熹、その門に出づ。

らくか 落髮 [名] ばうしゆと(落
下傘)に同じ。

らくか 樂髮 [名] らくげ(樂毛)に同じ。
樂髮・苦瓜(くわ) [句] 苦瓜・樂毛に
同じ。

らくかん 落雁 [名] 雁の列をなして
地に下らんとすること。『乾菜子(せ)
の。炒粉(ち)に砂糖を加へ、型に入れ
て、種種の形に押し固めたるもの。』

らくき 落暉 [名] らくひ (落日) に同じ。
らくき 落葵 [名] くるむらさき(蔓紫)の
漢名。

らくき 樂境 [名] たのしき境涯。安
樂なる境地。樂地。
らくき 樂郷 [名] たのしき郷土。樂
土。

らくき 落居 [名] おちめる(落居る)の
漢字の音讀 らくちやへ(落着)に同じ。太
平記天下の落居、一時が中に定まり候ふ
べきものをと。

らくく 落句 [名] 文(け)つ(句)に同
じ。『(尾句)に同じ。萬葉集代題』こ
の歌にては、第四句のウナキを上句に續
け放つ(け)にを、落句へ引分けて」

らくく 樂訓 [名] 『書』總論・節序 諸
書後論の四篇に分ちて、人生和樂の道を
説きたるもの。三卷。具原篤信の著。

らくく 落花 [名] 散りおつる花 散り
てある花。落英。落葉。

落花、枝に返らず [句] 落花、枝に上
り難しに同じ。『談語』 諸曲八島「落
花、枝に返らず、破鏡、再び照さず」

落花、枝に返る [句] 前條 [句] を、故ら
に打消ならぬ形に取り成せる語。守武
「落花、枝に返ると見れば胡蝶かな」

落花、枝に上り難し [句] 『破鏡(や)
重て照さず』を見よ。『一たび散
りたる花は、再び枝に著かず。』一旦
破れし物事の復活しがたき譬。『談語』

落花、心あり [句] 無情の落花にても
なほ流水に從ふ心あり。『談語』 諸曲
(鳥道)「げに、落花、心あり、人、心なし」

落花、情あれども、流水、意無し [句]
一方に情あれども、相手はその情を解
せざる譬。『談語』

落花・流水 [句] 落花、情あれば、流
水も、亦、意ありて、これを載せ去ると
の意 男に、女を思ふ情あれば、女に
も、亦男を思ふ情の生ずること、男女
の情意投合する譬。

らくく 洛外 [名] 洛外にある内野・
北野・紫野・上野(今宮の北)・萩野(上野
の北)・平野(上野)・蓮臺野の七つの野。
らくく 落花生 [名] 植 次條

らくく 落花生 [名] 植 結實の
状態にもつきたる名 莖(こ)科に屬す
る一年生の草。莖は高さ五六寸乃至二尺
位にて、莖狀に匍匐し、葉は羽狀複葉にし
て、通常四箇の小葉より成る。夏秋の交
黄色の小花開き、受精の後、直ちに花梗地
面に向ひて延長し、遂に地に穿入して、莖
を結び、種子は地中に成熟す。原産地
は熱帶亞米利加。廣く各地に栽培せらる。
種子は蛋白質と脂肪とに富み、滋養分大
にして、主に炒りて食し、又は菓子に用
ひ、咖啡代用に供し、食用に供し、又、落花
生油の搾取用に供す。たうじんまめ。な
んきんまめ。らくちしやう。

らくく 落花生油 [名] 落花生
の種子より採りたる油。帶緑黄色にして、
一種の臭味を有す。精製すれば、無味と
なる。主に食用に供し、又、石鹼製造の原
料にも用ふ。

らくく 落款 [名] 落成したる證と
する款識(ひ)の義 書畫を書きたる證と
して、筆者(ひ)づから、その姓名もしくは雅
號を記し、又は雅號の印を捺したるもの。
和漢共に、上世には、その例なし。

らくく 樂觀 [名] 世界を、全體と
しては完全・善美なるものと観すること。
(悲觀に對して) 物事を、心やすく好
都合なるやうに觀察すること。(悲觀に對
して)

らくく 樂觀說 [名] 哲 樂天觀(らくてんくわん)に同じ。(悲觀說に對して)
らくく 樂毛 [名] 心安樂なる者は、頭髮
の伸びること早しといふ語。らくがみ。
落苦瓜(く)・樂毛

らくく 烙刑 [名] はうらへ(烙烙)を
見よ。ひあぶり(火烙)に同じ。

らくく 落慶 [名] 工事の落成したる
いはひ。

らくく 落血 [名] 身體の一部より、血
が落ちつ 落月 [名] 沈まんとする月。

らくく 落月・屋梁の思 [句] 杜甫が夢李白
詩に「落月滿屋梁、猶疑照顏色」と

あるに本づく友を慕ふ心の切なる譬。
らくく 落語 [名] 方洲雜言に「始皆
傾軋、以爲正論、及三落語、莫不絕
倒」とあり 語の結末の部分。『おど
し』と落語に同じ。

らくく 落後 [名] 他人に對して、おくれ
をとること。人後に落つること。

らくく 落伍 [名] 兵士が、隊伍より離
れ後(ご)ること。『足弱き者が、同伴
者に離れ後(ご)ること。』力量乏しくし
て、仲間に進歩に伴なはぬこと。

らくく 樂娛 [名] ぐらく(娛樂)に同じ。
らくく 落紅 [名] 散りたる、紅き花。

らくく 落語家 [名] はなしか(話家)に
同じ。

らくく 樂園 [名] 樂しきくに。ごくら
らくく 落伍者 [名] 落伍したる人。

らくく 落魄 [名] らくはく(落魄)に
同じ。

らくく 落差 [名] 理 『英』 Fall 瀑布又
は流水などの如く、水の落下し、又は流下
する場合、高所と低所との間の距離。

らくく 落髮 [名] らくはつ(落髮)に同
じ。下學集落髮、ラクサイ。即落髮之義
也。』

らくく 樂歲 [名] ほうねん(豐年)に同
じ。らくさう 落想 [名] 思想を立案するこ
と。おもひつき。構想。著想。

らくく 落霜紅 [名] 植 うめぞ
き(落霜紅)の漢名。

らくく 落索 [名] 食ひのこし、飲み
あましの酒肴。下學集落索、日本俗呼
殘盃冷炙(爲落索也) 〔あら(粗)〕を
云ふ。『伊勢國の方言』

らくく 落札 [名] 入札したる目的の
事物の、己が手に落つること。おちふだ。
らくく 落札者 [名] 次條に同じ。
らくく 落札人 [名] 落札したる
人。入札に當りたる人。

らくく 酪酸 [名] 化 『英』 Butyric
acid 牛酪中に存する、油狀の液體。牛
酪の腐敗する時、酸味を呈し、臭氣を發す

らくちゆうけいゑい 洛中警衛〔名〕鑑

なる土地 樂地 樂苑 樂園
ん(樂園)に同じ。

らくはつ 落髪〔名〕ていはつ(剃髪)に同

らくーやう 落陽【名】らくじつ(落日)に同

つせんさう 螺旋草【名】〔植〕田麻(カラスノコマ)
科に屬する一年生の草。高さ二尺餘、葉

らせんじ

は互生し、長卵形にして、基部、心臓状をなし、長き葉柄を具へ、葉腋に、黄色、五瓣の小花簇生す。果實は球形にして、鉤状の刺毛密生す。原野に自生す。

らせんじやう 螺旋状「名」らせんけい(螺旋形)に同じ。

らせんじやうきん 螺旋状菌「名」(植)螺旋状に彎曲せる細菌。コレラ菌の如き、その一なり。螺旋菌。

らせんすおひんき 螺旋推進器「名」(理)「らせんき」推進器(を)見よ。

らせんすおひんきせん 螺旋推進汽船「名」「英 screw steamer」螺旋推進器によりて航走する汽船。螺旋汽船。

らせんくみあげき 螺旋水揚機「名」螺旋の作用によりて、水を高處に送る装置。長き圓筒の内に、外縁をその内壁に接觸せしめたる螺旋状の軀軸を取り附け、圓筒の下端を水中に入れて回轉すれば、水は漸次上方に傳はりゆき、遂に筒の上端より流出す。龍尾車。

らせん 選卒「名」選選して守る兵卒。選兵。

らせん 巡査「名」巡査の舊稱。明治三年、各府縣に置かれ、同六年六月、取締組、捕吏等と共に、すべて番人(と改稱し、舊年五月、等外吏に准じ、その翌年三月、舊名に復せしが、同年十月、巡査の名に改めらる。明治五年八月開拓使に置きたる等外吏。大中少の三等に分れ、何れも、同七年十月廢せり。

らたい 羅帶「名」羅(帶)のおび。

らたい 裸體 裸體 裸體 裸體「名」はだか。裸身。

らたい 裸體畫「名」裸體の姿を畫らたいけい 羅大經「名」(人)支那宋の盧陵の人。字は景綸。著す所、鶴林玉露十八卷あり。

らたい 螺塔「名」(動)螺の殻の、塔の如く高く尖れる部分。

らち 埒「名」馬場の周圍の柵。をらち(雄埒・雌埒)参照。漢氏(東面)は、わきて、馬場(埒)のおとど造り、埒ゆ

らち

埒が明く「句」奈良の春日の神社の祭禮にて、一夜、神輿を外に遷し、周圍に埒を結びて、人の衆に近づくこと無からしめ、翌朝、金春(金春)氏の猿樂、幣を持ち來て、神輿の前に進み、埒を開きて祝詞を讀みたる後諸人の入るを許すことありしよりいふ。物事はかどる。仕事、帶なく進む。始末が附く。かたづく。解決す。さりとて埒が明くは心出、勘定し、さりとて埒が明くは明く。されども、大阪に置かれまい。」埒が早し「句」事の進行早し。手まはしよし。はかどる。

埒が無し「句」次條に同じ。重井(埒)ひとりころりは、ええ、埒が無い」埒も無し「句」(前次)も無し」の訛。漢氏(埒)折、埒ひて、何の埒も無し」埒を明く「句」埒の明くやうにす。在言(埒)「いかにやうのむつかしい事があるとも、埒ある事ござる」埒を爲(ス)「句」前條に同じ。西樂野中の埒(埒)「埒」望なら銀(埒)持つて、朝の間に、埒しに」埒を附く「句」埒を明く」に同じ。

らち 羅致「名」(鳥を羅)にて捕る如くする義。韓愈の送溫處士序に「以禮爲羅、羅而致之」云々」とあり「招きて來らしむ。人を引き寄す」。

らちあかずや 埒不明屋「名」埒の明かぬ人。いさぎよく支拂はぬ人。胸算用屋(は)は、取りよ、所より集めて、埒明かず屋と知れたる家(終)にねだり込み」

らちあむ 助數「名」(化)「Radium」(放射)の意を取りて、發見者の命じたる名稱「放射性」を有する、一種の稀有なる金屬元素。化學的性質はバリウムに類似す。佛人ベクレルが、ウラニウム(原)の原(原)を發見せし後、その門下の佛人キュリー(Curie)夫人が、この性質はウラニウムに屬するか、チビツ

ラレント中の他の物質に屬するかを研究せる結果、ポロニウム・アクチニウムと共に發見せる新元素にして、しかも、その量中、最も多く存在すれど、しかも、その量は、ビッチブレンドよりウラニウムを除きたる、殘滓一〇〇〇キログラム中、僅かに〇・二グラムを得るに過ぎず、從ひて甚だ高價なるのみならず、複雑なる手續を経て、その臭化物、鹽化物もしくは硫化物を得るに止まり、純粹なるものは得がたし。その化合物は、暗處にて光を現し、シヤン化白金・バリウム或種の硫化亞鉛等に強き螢光を與ふる性質ありて、アルファ(α)線・ベータ(β)線・ガンマ(γ)線と呼ぶ三種の放射線を發す。アルファ線は、毎秒二萬哩の速度にて射出する陽電子、ベータ線は毎秒十萬哩の速度にて射出する陰電子、ガンマ線は、陰電子の、ラヂウム鹽の質内に出づるにいたり、その實質を刺戟するがために生ずるエックス線なり。

らちあむ いろさんぶつ ラヂウム遊散物「名」(理)次條に同じ。

らちあむ えまねおん (獨 Radiumemanation)「名」(理)ラヂウム及びその化合物が、その體中よりアルファ線・ベータ線及びガンマ線を射出する以外に、なほ變態・放散する一種の氣體。特有の、スベクトルをあらはし、又、液體空氣の寒冷に逢へば、液體となり、又、固體ともなる。

らちあむ えん ラヂウム鹽「名」(化)ラヂウムの鹽化物。

らちあむ くらせん ラヂウム 鑛泉「名」ラヂウムを含める鑛泉。

らちあむ れうはふ ラヂウム療法「名」ラヂウムを使用し、その作用によりて、諸種の腫瘍を治療する法。

らちあむ せんせん ラヂウム溫泉「名」ラヂウムを含める溫泉。

らちええじよん (英 Radium)「名」(理)「ふ」(放射)に同じ。無線電信及び

らちあむ

無線電話にて、電波を構成して、四方に傳播すること。

らちあ (英 Radio の訛)「名」もと Radiophone の略。Radio は射線の義なる羅句語より出づ。電波に依る通信、即ち無線電話・無線電信の總稱。特に、はうそ(無線)でんわ(放送無線電話)に同じ。

らちあき ラヂオ機「名」放送無線電話の受話に必要な、諸種の機械。

らちあき ラヂオ劇「名」はうそ(無線)でんわ(放送)に同じ。一條に同じ。

らちあき ラヂオ箱「名」鑛石式のラヂオ機を組み立てて入れおく、木製の箱。

らちあき ラヂオ版「名」毎日の新聞紙に添へて、その日のラヂオの番組放送及びこれに關する記事を滿載したる紙面。

らちあき ラヂオ屋「名」ラヂオ機を賣る家又その人。

らちあき 埒口無し「句」口は假借の文字。らちに對して、音調の上よりくちを添へたるは、むやに(埒)を添へて、むや(無茶)苦茶といふ語を生ずる類。「埒次口」無し」の訛。

らちん 羅陳「名」つらねならぶこと。又、つらなりならぶこと。羅列。「唯、らちやう 羅帳「名」羅(帳)のとり。羅(帳)を測る時の單位。半徑に等しき弧の上に立つ中心の大きさを、ラヂヤンといふ。

らちやう 裸體 裸體 裸體 裸體「名」孔子家語の執轡篇に「裸體三百有六十、而人爲之長」とあり「はだか(裸體)に同じ。

らちきよ 辣蕪・蕪「名」(植)次條の約。らちきよ 辣蕪・蕪「名」(植)辣蕪(の)の訛「百合」科に屬する多年生の草。高さ一二尺、葉は狭長にして、平行脈を有し、其脚は白色を呈し、肥厚して、地下莖

らちあ

無線電話にて、電波を構成して、四方に傳播すること。

らちあ (英 Radio の訛)「名」もと Radiophone の略。Radio は射線の義なる羅句語より出づ。電波に依る通信、即ち無線電話・無線電信の總稱。特に、はうそ(無線)でんわ(放送無線電話)に同じ。

らちあき ラヂオ機「名」放送無線電話の受話に必要な、諸種の機械。

らちあき ラヂオ劇「名」はうそ(無線)でんわ(放送)に同じ。一條に同じ。

らちあき ラヂオ箱「名」鑛石式のラヂオ機を組み立てて入れおく、木製の箱。

らちあき ラヂオ版「名」毎日の新聞紙に添へて、その日のラヂオの番組放送及びこれに關する記事を滿載したる紙面。

らちあき ラヂオ屋「名」ラヂオ機を賣る家又その人。

らちあき 埒口無し「句」口は假借の文字。らちに對して、音調の上よりくちを添へたるは、むやに(埒)を添へて、むや(無茶)苦茶といふ語を生ずる類。「埒次口」無し」の訛。

らちん 羅陳「名」つらねならぶこと。又、つらなりならぶこと。羅列。「唯、らちやう 羅帳「名」羅(帳)のとり。羅(帳)を測る時の單位。半徑に等しき弧の上に立つ中心の大きさを、ラヂヤンといふ。

らちやう 裸體 裸體 裸體 裸體「名」孔子家語の執轡篇に「裸體三百有六十、而人爲之長」とあり「はだか(裸體)に同じ。

らちきよ 辣蕪・蕪「名」(植)次條の約。らちきよ 辣蕪・蕪「名」(植)辣蕪(の)の訛「百合」科に屬する多年生の草。高さ一二尺、葉は狭長にして、平行脈を有し、其脚は白色を呈し、肥厚して、地下莖

うしあ

るもの。古は、主として、屋久貝を用ひ、今は、上等品には眞珠貝を用ふることあり。あをがひ。漢氏「時給らてん」

螺鈿の太刀【句】鞘を螺鈿にて飾りたる太刀。木地【句】螺鈿の太刀。時給螺鈿の太刀。種【句】螺鈿の太刀。螺鈿の野太刀の種あり。

螺鈿の野太刀【句】螺鈿の太刀の一種。野太刀の鞘を螺鈿にて飾りたるもの。節會【句】の時、近衛の次將、これを佩用せり。文官は用ひずといひ、又、三位以上は金作【句】四位は銀作といふ。いへど、近世はすべて銀作なりといふ。

らてんあめりか 羅甸亞米利加【名】拉丁亞米利加【英 Latin-America】【名】【地】「西班牙葡萄牙等、羅甸民族に屬する國民の植民せる地なるよりいふ」南亞米利加洲の諸國の異稱。

らてんくわいさうめい 羅甸貨幣同盟 拉丁貨幣同盟【英 Latin Monetary Union】【名】西曆一八六五年、佛蘭西、白耳義【名】瑞西【名】伊太利の四國間に盟約し、後、一八六八年、希臘國も加はりたる貨幣同盟。金銀兩本位制を採用し、兩者の比價を、金一、銀十五半と定め、その鑄造貨幣を共同流通するやうにせるもの。然るに、普佛戰役の後、獨逸は佛蘭西より多額の償金を得て、金貨本位國となれる等の結果、銀の比價低落し、同盟加入の諸國も、事實に於て、金貨本位國となるに至れり。

らてんくわいさうめい 羅甸教會、拉丁教會【名】「宗」エホバの證人【名】(羅馬加特力教會)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸教會、拉丁教會【名】「宗」エホバの證人【名】(羅馬加特力教會)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸教會、拉丁教會【名】「宗」エホバの證人【名】(羅馬加特力教會)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸教會、拉丁教會【名】「宗」エホバの證人【名】(羅馬加特力教會)に同じ。

うしん

重直【名】「ひゆぞく」羅甸種族拉丁種族【名】「らてんじんぞく」(羅甸民族)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸同盟、拉丁同盟【名】「らてんくわいさうめい」(羅甸貨幣同盟)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸同盟、拉丁同盟【名】「らてんくわいさうめい」(羅甸貨幣同盟)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸同盟、拉丁同盟【名】「らてんくわいさうめい」(羅甸貨幣同盟)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸同盟、拉丁同盟【名】「らてんくわいさうめい」(羅甸貨幣同盟)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸同盟、拉丁同盟【名】「らてんくわいさうめい」(羅甸貨幣同盟)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸同盟、拉丁同盟【名】「らてんくわいさうめい」(羅甸貨幣同盟)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸同盟、拉丁同盟【名】「らてんくわいさうめい」(羅甸貨幣同盟)に同じ。

らてんくわいさうめい 羅甸同盟、拉丁同盟【名】「らてんくわいさうめい」(羅甸貨幣同盟)に同じ。

うしん

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

うしん

色にして、臭味無く、蜜蠟、鯨蠟など、種類多し。成分は、パルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸の如き脂肪酸の有機酸と一價のアルコールとの化合物の形で、脂肪類は、アルコールが三價なる點に於て、これに異なるのみ。成分は異なるれども、外觀と性質とに於て、前項のに似たる物。例へば、パラフィン、封蠟、地蠟【名】木蠟【名】等々。【らばうし】(蠟燭)の略。

蠟を嚼むが如し【句】「傍嚴經」に「當三橫陳時、味如嚼蠟」とあり。詩文又は燒過などの平凡、無味なる譬、砂を嚼む【名】(謬語)。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

らばうし 羅望子【名】「植」てうせんもだま(朝鮮もだま)の漢名。

〔名〕〔人〕文學者。希臘の故地イオニア群島中に生る。父は愛蘭土人、母は希臘人。佛國にて初等教育を受け、後、久しく米國にありしが、明治廿三年五月、我國に渡來し、出雲國松江中學に英語教師を勤

め、翌平、熊本高等學校に轉任せしが、我國の風物を愛し、歸化して、名を小泉八雲（コイノミヅ）と改む。三十年以後、帝國大學に英文學を擔任すること六年間、後、早稻田大學に轉じ、廿七年病歿す。年五十五。著書、すべて東洋に關するものみにて、雅儀も、素志に基きて、佛式を用ひ、法名を正覺院淨華八雲居士といふ。

らふがひらふ貝【名】「動」さるほほ（猿
類）四を云ふ。「土佐國の方言」
らふがみ 蠟紙【名】蠟引の紙。表面にバ

ラフィンを塗りなどしたる紙、水濡を似る場合に用ふ。「根」の漢名。

らふく 蘿蔔 蘿服「名」「植」だいこん(大らふく) 蠟畫「名」あぶらえ(油畫)に同

じ。春渡機筆記「名山・勝景を寫眞にして
阿蘭陀の法を以て、蠟畫に畫き」
らふくわん 蠟管〔名〕^一蠟製の管。^二
舊式の密音器にて、舌を鑿へおぐて用ひ

たる、蠟製の圓筒。
らふぐわん 蠟丸〔名〕支那唐の時代に、
蠟を丸めて、中に密書を封じ、人にさくら

れぬやうにして 他に送れるもの 蠟を
らふげき 蠟屐〔名〕 蠟を塗りて、水濡を
防ぎたるあした。
らふげち 蠟額・蘭額〔名〕 上古に行はれ

し、布帛の染方の一。模様を現すべき部分に蠟を塗りたる後、染汁に浸し、蠟を去れば、その部分の白く残るやうにしたるもの。かうけち(交蠟)参照。

らふげつ 臘月〔名〕らふ(臘) 同。
らふけみ 蠟檢見〔名〕徳川時代に、奥州
の漆の實に對して行ひし檢見。

惠州府博羅縣の西北部にある山。山上、
廟宇多く、東晉の代、葛洪が仙術を修めし
所として、又その麓に梅花多きを以て、
有名なり。

らふざらざ 蠟更紗〔名〕蠟染の更紗。
らふじ 蠟紙〔名〕うぶがみ(蠟紙)に同じ。
らふじ 臘次・薦次〔名〕〔佛〕『薦は俗字、

作來「云三點心、云三布施物、糺三蘭次、可注
 給上下之品也」 「て、戀愛の場面」
 らぶーいん (英 Love scene) 【名】 演劇に

とふし二臘日「名」二支那にて臘祭を行ひし日、即ち冬至後、三回目の戌の日。曰一年の最終の日。おほつごもり。おほみそか。せいし。目「佛」らふち(臘八)

に同じ。
らふじよ 臘書〔名〕書を、蠟にて包み、
水濕を防ぎたる密書。蠟丸。
るふせき 蠟石〔名〕〔蠟〕珪質にて、

多少脂様の觸感ある石。色は白・赤・黄・碧などあり。柔かにして、容易に削ることを得、磨けば、脂光を發す。印材・文具などに造り、耐火煉瓦の原料に用ひ、粉末は、器

械の摩擦緩和用に供す。
らふせき―ひつ　蠟石筆〔名〕蠟石にて造
りたる石筆。

らふそく 蠟燭〔名〕（ロソク） 又は木
らふせつ 臘雪〔名〕臘月に降る雪
らふせん 羅浮仙〔名〕「羅浮の仙女」に
同じ。

綿絲を心(ジ)とし、蠟を細長く塗り固めて製し、點火用に供するもの。絲を心に用ひたるを、絲心(ジ心)といふ。我國在來のは、木蠟(マロウ)を塗りて製したれども、今

は、別に、西洋蠟燭も多く行はる。おとぼし。日紋所の一。前項の蠟燭に象りたるもの。丸に一(卅)蠟燭・三割(ワ)蠟燭

一種。二三日にして、陰莖龜頭の全部、潰滅し、甚しきは、陰莖をさへ失ふことあり。蠟食性下疳。

て鼻の孔を炙る拷問。
らふぞくだい 蠟燭臺「名」しよくだい(燭臺)に同じ。庭訓往來「火針・蠟燭臺」

らふそく／＼たて 蠟燭立〔名〕前相似し
らふそく／＼だて 蠟燭立〔名〕石を、庭など
に、堅に据ゑつゝること。
らふそく／＼のき 蠟燭木〔名〕「植」やまぐる

ま(山車)に同じ。
らふそくや 蠟燭屋【名】蠟燭を製し又
は賣る家、又その人。
らふそく 蠟燭【名】古代の蠟燭(ろうそく)と

同様の方法による色染。
らふ・たく・臘・長く・蔦・長く〔句〕らふ・臘
の條下を見よ。
〔紋竹〕に同じ。

らふ「たけ」蠟竹「名」植うんむんちく雲
らふ「ち」蠟地「名」布又は紙の地合（じあ）
の、蠟を引きたるが如く、光澤ありて、滑
かなるもの。胸算用「十枚つぎの蠟地の紙

に、御免筆(ゴマン)の名印(イ)まで記したるを賣りけるに」

らふにんぎやう 蠟人形「名」蠟を固め
らふぬり 蠟塗「名」蠟を塗りて、光澤を

出すこと 又その方法を用ひたる物
 らふのき 蠟樹【名】「植」はぜのき(植樹)
 に同じ。
 らふばい 臘梅【名】「植」臘梅科に屬す

る落葉灌木。叢生して、高さ一丈餘に達す。葉は對生し、全縁、卵形にして、先端尖る。花は、葉に先立ちて、二月頃開き、香氣

らふばいぐわ 臘梅科〔名〕「栂」顯花植物・被子類雙子葉門離瓣花區に屬する一科。一屬・五種を含み、その内、我國にて栽培するもの二種あり。

らふはち臘八〔名〕〔佛〕『臘月八日の義』十二月の八日。支那の諸寺、又、我國にても、禪宗の寺院は、釋尊成道(ジャウ)の記念日なればとて、一日よりこの日の

前日まで、成道會(ジャウ)を行ふ。俳諧新選不有「臘八にただ坐し明かす人もがな」(二)次條に同じ。「會」に同じ。

らふはちがゆ 臘八粥〔名〕『支那の諸寺、又、我國にては、禪宗の寺院にて、臘八の日に食するよりいふ。天中記に「宋時

東京十二月朔八日。都城諸大寺。送ニ七寶五味粥。謂ニ之臘八粥ことあり。うんざろがゆ(溫藏粥)に同じ。

末。臘末。
らふびぎ 蠟引〔名〕■紙又布に、パラフィン蠟などを薄く塗ること、又その塗りたる物。■らふぢ(蠟地)に同じ。

らぶびぎ^一ぬの 蠟引布〔名〕防水用に供
するために、パラフィン蠟を引きたる綿
布又は絹布。油布^二。
ふぶ^三 蠟布〔名〕前条に同じ。

らふふう 蠟封【名】手紙などを、蠟にて、封ずること。
らふへえばあ (英 Rough paper) 【名】質

らふまっち 臘末〔名〕らふび(臘尾)に同じ。
らふまっち 蠟燭寸〔名〕マッチの一種。
らふ。 の粗くして、光澤なく、上品なる西洋紙。

綿絲にて心(シ)を造り、融解せるバラフィ
ンの中を通過せしむること數回にして、
一定の太さに至らしめ、よく乾したる後、

らへんが、燦開「名」花の燦漫として開

に人き 嵐采「名」蒸しうるほへる山氣

敵の進退を妨ぐるために設くるもの。

蘭 婦人の美しき花や

あさ

らんけい 蘭雞「名」動。雞の一種、和蘭よりの輸入に係り、體軀大にして充實し、毛冠密生、顔面鮮紅色を呈し、尾は大形にして開張し、雄は雌より大なり。

らんけい 亂形「名」變亂の形勢。

らんけい 濫刑「名」みだりなる刑罰。過當なる刑。

らんけい 蘭蕙「名」蘭と蕙と。春蘭と秋蕙（共に香草）。十訓「蘭蕙苑風摧紫後、蓬萊洞月照箱中」。

らんけい 蘭契「名」金蘭の契に同じ。

らんけい 蘭鏡調「名」蘭鏡の調子。徒然草蘭鏡調をおきて。

らんけい 亂逆「名」らんぎやく（亂逆）に同じ。歴代將門（一）……純友（二）……東西に鼻を並べて亂逆せしに。

らんけい 亂擊「名」入りみだれて攻撃。

らんけい 蘭月「名」陰曆七月の異稱。

らんけい 蘭峽「名」地。峽の字の音。實はかた大和國嵐山の麓、大井川の山峽。

らんけん「名」らんけんの訛。博多小女郎漫説「らんけん・縷子・天鷲（一）」。

らんこ「名」種。かつら（桂）に同じ。

らんこ 覽古「名」古蹟を觀覽する義。

らんこ 懷古に同じ。

らんこ 蘭語「名」おらんだ（和蘭語）のらんこ。蘭語「名」遊戲の。基石を、指頭につけて拾ひ取り、その多少を以て、勝負を争ふことといふ。一説には、白き方の石のみにて打ち、四目殺（ヨシ）といふ事をなすもの、又は碁盤の線上に基石を並べ、線に沿ひて石を取り、筋道には取らぬこととある、それをいふかと。らご。續世繼「さざれ石まきて、らんご拾ふ音など聞えけるを」。

らんご 爛嬌女房の中にまじりつつ、蘭恭貝おほひ・手鞠・へんつきなどやうの事どもを、思ひにしつゝ。

らんご 亂後「名」世のみだれたるのち。

らんご 亂國「名」みだれたる國。亂邦。正統記中古となりて、亂國とはなれり。らんご・らんごくに同じ。陸奥毛「樂屋さあへ跳ね込んで、亂國を遣る」。

あさ

らんざ 亂座「名」秩序なくすわること。

らんざい 蘭摧「名」次條に同じ。

らんざい 蘭摧玉折「句」蘭摧れ玉摧くに同じ。蘭摧玉折「句」蘭摧れ玉摧くに同じ。蘭摧玉折「句」蘭摧れ玉摧くに同じ。

らんざい 蘭齋「名」らんざい（森蘭）。

らんざい 卵細胞「名」生。『英大』。有性生殖を行ふ動物に於て、雌性の生殖器官に生成し、將來、一箇の獨立體となるべき、一種の遊離細胞。動物の卵巢の内、植物の胚珠の内に包藏せらる。精子と合體して後、發育を始むるが普通なれども、時として、全く單獨に發育を遂げることあり。即ち、前者は兩性生殖、後者は單為生殖にたまご。卵（二）。卵球。卵球。

らんざう 卵巢「名」動。『獨大』。高等動物の雌性の生殖器官の一部。卵を生ずる作用を有す。人類のは、骨盤の側壁に位し、扁平なる卵圓形をなし、黄褐色を呈し、靱帶によりて、子宮に連繫す。

らんざう 蘭藻「名」謝靈運の詩に「清辭麗蘭藻」とあり。美しき詞藻。

らんざう 蘭草「名」蘭。ふはかま（藤袴）に同じ。

らんざう 亂草「名」みだれ生えたる草。

らんざう 亂噪「名」みだれて、さわがしきこと。みだれて、さわがしきこと。

らんざう 亂聲「名」らんじやう（亂聲）。『約』。古語。漢氏打毬樂落蹄など遊びて、勝負のらんざうやうものしるも、夜に入りては、何事も見えなかりはてぬ。『舞樂の初に吹きたつる笛。』

らんざう 濫造「名」みだりに造り出すこと。濫製。『粗製濫造』。

らんざう 濫作「名」みだりに多く作る。

らんざう 爛雜「名」入りみだれること。規律の立たぬこと。不整頓。混雜。雜亂。

らんざう 爛爛「貌」さんらん（爛爛）に同じ。『山』。

らんざう 亂山「名」高低一様ならぬ山。

らんざう 嵐山「名」地。山城國嵐山（一）の異稱。

あさ

らんざんせい 亂散星「名」あらはれし星に同じ。

らんざんせい 亂騒「名」亂暴なるさわぎ。らんざんせい。春花五大刀「毎日毎日、夫婦喧嘩、亂さわぎ」。

らんざんせい 蘭芝「名」らんざん（芝蘭）に同じ。

らんざんせい 蘭絲「名」みだれたる絲。

らんざんせい 卵子「名」生。『英大』。受精したる卵細胞。卵細胞と精蟲と合體して一箇の細胞をなし、發育すれば生物の一箇體となるべきもの。たまご。卵（一）。

らんざんせい 亂視「名」眼の先天的異常のため、物影を、明かに視ること能はざること、又その眼、角膜の各方面に於て、屈折率に強弱の差あり、即ち遠視、近視乃至正視の混淆せるに因る。こと。

らんざんせい 爛死「名」焼けただれて死ぬる。

らんざんせい 亂辭「名」文。はんか（反歌）を見よ。同じ。

らんざんせい 蘭舟「名」らんせん（蘭船）に同じ。

らんざんせい 蘭質「名」王勃の七月賦に「金聲玉振、蕙心蘭質」とあり。蘭の香高くすぐれたるに譬へていふ。高雅なる質。盛衰記「心を蘭質の手に移せば、秋の露、展ば脆し」。

らんざんせい 亂臣「名」孟子の滕文公下篇に「孔子成春秋、亂臣賊子懼」とあり。君を執する臣。逆臣。『書經の泰誓篇に「予有亂臣十人」とあり。天下をよく治むる臣。』

らんざんせい 亂心「名」心のみだれること。みだれごころ。狂亂。狂氣。八笑人「始終亂心の扱ゆる」。

らんざんせい 亂人「名」國をみだす人。反逆人。亂賊。らんざんせい（亂心者）に同じ。『二男男』神を恨み、佛に嘆き、亂人となつて。

らんざんせい 亂人「名」和蘭國の人。

らんざんせい 亂心者「名」亂心の人。きちがひ。狂人。亂人。

らんざんせい 蠻車「名」らんざん（蠻車）を見よ。天子の御料の車。蠻駕。蠻輿。蠻輅。

らんざんせい 亂射「名」的を確かに定めず、

あさ

むやみに、矢又は彈丸を發射すること。

らんざんせい 蘭蘭「名」蘭の花と、麝香と。『香善人』と交れば、蘭蘭の窓に入るがごとし。『よき香（一）』。芳香。十訓「身に蘭蘭を薫じ」。

らんざんせい 蘭省「名」白居易の廬山草堂、夜雨獨宿、寄平李庚三十二員外詩に「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」とあり。しやうしやうせい（尙書省）の異稱。就「蘭省の花の時、錦帳のもとと書きて、末はいかに、いかにとあるを」。『だじやうくわん（太政官）の唐名。唐原抄「太政官、當唐尙書省」。又號三寶臺、蘭省」。

らんざんせい 蘭蘭「名」らんざん（蘭蘭）に同じ。行ふこと。

らんざんせい 濫賞「名」みだりに賞與をらんざんせう。濫賜「名」楊子江も、水源に湧れば、纔かに觸つて濫（一）ぶる程に微なる義。孔子家語の三恕篇に「江始出于岷山、其源可涇以濫、觸及至其至江津、也、不舫舟不避風、則不可涇以濫」とあるに本づく。物事のはじまり。おこり。

らんざんせい 卵生「名」らんせい（卵生）に同じ。佛教に關する文章中に用ふ。『胎卵濕化の内、卵生罪深し』。

らんざんせい 亂聲「名」雅樂にて、笛太鼓及び鉦鼓を合奏する一種の曲。拍子にあやなく、太鼓は始終片撥にて、遅緩なく打つ。行幸の時、著御を知らしむるなどにも奏したり。らんざん。らんざん。文德實錄盛奏亂聲、即使左右相撲（一）。大鏡「行幸なりて、亂聲し、待ちまじり奉らせたまふ」。『亂（一）の聲に同じかるべしといふ。』蒙古襲來繪詞色色の旗を立て並べて、らんざんやうひまなくして、ひしめきあふ。

らんざんせい 蠻城集「名」支那宋の蘇轍の詩文集。正集五十卷（詩賦辭銘頌新論策問答等）、後集二十四卷（詩文並に孟子解、第三十卷論語拾遺、洪範五事等）、應詔集十二卷、合はせて九十六卷。すべて轍の手に係り、嘉靖板には、應詔集を省けり。

る食品を料理するに用ひし方

らん

らん

らん

らん

らんだつ 爛脱【名】『荀子の序に「編簡爛脱傳寫誤謬」とあり』麻紙などの敗れ腐りて、脱け落つること。文の處處脱落して、義理の連續せぬこと。

らんとふ 卵塔・蘭塔【名】『鳥の卵に似たる形の墓石。無縫塔。』昔問へば卵塔まての葉末から。『墓。卒都婆(一)。』太平記「骨は空しく留りて、卵塔一掬の塵となりけり」。

らんだふ 卵塔場・蘭塔場【名】はかば。はかし。墓地。藤葉毛(一)など、爰の内は卵塔場ぢやあねえか」。

らんだん (獨)蘭丹【名】『化。金屬元素の一。産出少く、暗灰色を呈し、化學上の性質、セリウムに酷似し、最もアルカリ土金屬に類似す。』

らんち (英)蘭切【名】一定の食事の間に取る、簡單なる食事。

らんち (英)蘭切【名】軍艦に附屬する端艇の、最も大形なるもの。

らんち 蘭地【名】陰曆四月の異稱。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんち 蘭痴氣【名】情事に關する嫉妬にもとづく暗癖。

らんに 蘭梯【名】らんかい(蘭階)に同じ。

らんに 蘭亭【名】支那浙江省紹興府の東南部に會稽山の北にありし亭。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭亭【名】支那唐の太宗が、王羲之の蘭亭帖を愛し、遺命して、共に棺中に入れて葬らしめし故事。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭田【名】蘭を植ゑたる畑。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

らんに 蘭入【名】みだれ入ること。闖入にふ。闖入【名】無法に入ること。

白(卵黄に對して)

らんばけ 蘭刷毛(名) 繪畫用の、一種の刷毛。毛質強靱粗刷にして、岩石などを描くに用ふ。

らんば 覽箱覽宮(名) 『御覽箱の略』 宜旨を入るための箱。藤葛(つた)にて製し、蓋あり。平室、院宜をは覽箱に入れられたり。

らんばつ 亂髮(名) 亂れそけたる頭髪。蓬髮。

らんばつ 濫伐(名) 山林の木をやたらに伐ること。

らんばつ 濫罰亂罰(名) 規律なく罰する。濫發(名) 目あても定めず發射すること。

らんばつ 濫發(名) 秩序もなく發布又は發行すること。

らんばつ 蘭發(名) 花のみごとに開く。らんばつ 蘭法(名) 和蘭國の様式。

らんばつ 蘭方(名) 蘭國の様式。らんばつ 蘭畔(名) 欄干のほとり。欄

らんばつ 蘭斑(名) 爛斑。爛編(名) はんらん(斑爛)に同じ。

らんはん 亂反射(名) 『理』 『英』 regular reflection 平滑ならざる面を光線が射る時に生ずる、方向の不定なる反射。

らんはん 鷹の頂の前方、嘴の根もとにらんはん 藍尾・藍尾(名) 『湘素雜記』

『酒巡郎』 藍尾。南朝有『英國進貢藍尾長三丈』。人倣之以爲酒令、仇池筆記に『蘇蜀云、以酒巡郎爲藍尾。一作『藍尾』とあり。古饗宴の時、杯を順次に巡らし、最終の者の三度連飲せしこと。由緒藍(仁安二年六月廿五日)今日切見云云。』

らんはん 藍尾(名) 『楊萬里の詩に』 破却楚尼基、領略打頭、群碎、錄に『桑維翰云、唐末文人謂芍藥爲藍尾春。蓋楚尼酒、乃最後之杯。芍藥、春、故名』とあり。しまひ。最終。

らんはん 藍尾(名) 『地』 らんはん 藍尾らんはん 爛糜(名) びらん(糜爛)に同じ。

らんはん 濫費(名) 規律なく費すること。むだづかひ。浪費。

らんびき 蘭引(葡 Alambiqua) (名) 酒類、藥物などを蒸溜せしむるに用ふる器。多くは陶製にして、深き鍋の上に、更に、同じ深きの鍋を蓋とし、上の方に、冷水を盛り、下の方を火に掛ければ、蒸氣、次第に上りて、蓋の裏面に達し、その氣、水のために冷えて、露となり、その裏面の一方にある、下向きの口より流れ出づるを、他の器にて受く。

らんびき 亂筆(名) 亂暴に書くこと。みだれがき。

らんびき 藍尾尼 鼠毗尼(名) 『地』 次條らんびきにせん 藍尾尼 鼠毗尼 苑(梵 Lambhivana) (名) 『地』 藍尾尼は鹽又は可愛と譯す。上古國を守りし婢の名。天竺迦羅(カ)城の東方にありて、摩耶夫人(マ)の釋迦を生みし花園。西曆一八九六年、フュレル博士、その遺址を、尼波羅(ネ)國、アトルワ州、タライ森林中に發見せり。藍尾尼。藍尾尼。藍尾

らんびき 亂髮(名) らんばつ(亂髮)に同じ。らんびき 亂髮(名) 長髪となりまして

らんびき 亂拍子(名) 猿樂・能樂などに、小鼓のみにて奏する、一種の曲。『道成寺』の曲の急の舞の前にあり、觀世流にては『草子洗』の曲にもあり。仕手方、小鼓方の共に、極めて重しとし、呼吸の合致に努力する所なり。十調、鼓を打ちて、亂拍子の次第を取る。

らんびき 藍尾尼 鼠毗尼 苑(名) 『地』 らんびきにせん(藍尾尼苑)の略。宴會年中行事『中天竺の藍尾尼苑』

らんびき 亂舞(名) 『梁の簡文帝の筆賦に』 爲七十二、亂舞未成、行とあり。順序も無く亂れ舞ふこと。『鎌倉時代以後、宮中にて、殿上調醉などの時、催馬樂(ウ)・朗詠と共に舞ひし、一種の散樂。』

らんびき 殿上調醉の間、中將教成亂舞落冠云云。『能』の演戲の間に、行ふ舞。『後醍醐天皇記』 鼓舞の堪能共多ければ、亂舞可三催。らんびき 懶婦(名) 懶惰なるつま。

らんびき 檻布(名) ぼろきれ。ぼろ。

らんぶ 洋燈(英 Lamp) 西洋風の燈火器。石油を燃料とし、これを入れたる器(金屬製又は硝子製の口金より、綿布製の心(ウ)を挿して、石油に浸らせ、口金の上下に出たる部分に火を點け、なほ、硝子製の火屋(ウ)にて、火の周囲を蓋ふやうにせるもの。『はげあたま』 赤頭、電燈。

らんぶ 明治中期前後の語。らんぶ あたま 洋燈頭(名) 前條に同じ。らんぶ 藍風(名) 『佛』 びらんぶ(風)の略。

らんぶ 亂舞(名) 『亂舞の舞に、武藝の武を含めたるなるべし』 亂舞に等しき、慰み半分の武藝。『雪女五枚羽子板』 四人の兄は、親の饗けし亂舞藝。

らんぶ 交換機(英 Lamp switchboard) (名) 電話交換機の一。加入者の交換局を呼びたる時、又は加入者の通話の済みたる時、交換手はランプの點火によりてこれを知り得る装置のもの。

らんぶ 洋燈心(名) ランプに火を點するに用ふる心。木綿絲にて、扁く打ちたるを普通として、その幅によりて、三分心・五分心などいひ、又、丸きもありて、丸心といふ。

らんぶ 卓上用の臺。らんぶ 洋燈臺(名) ランプを載すための、鐵製の自在鉤。

らんぶ 藍文(名) 和蘭語の文章。らんぶ 藍碧(名) 藍色を帯びたるみどり。らんぶ 藍邊(名) らんば(欄畔)に同じ。

らんぶ 藍鳳(名) 『藍鳥と鳳凰と。』らんぶ 君子・正人の譬。『同志の友、夫婦の契などの譬。』

らんぶ 亂峰(名) らんざん(亂山)に同じ。らんぶ 藍本(名) げんぼん(原本)に同じ。らんぶ 欄間(名) 『建』 天井と鴨居又は

長押(ウ)との間に、採光又は通風のため格子又は透彫(ウ)の板を取り付けてある所。らんぶ 亂麻(名) 入りみだれたる麻。

らんぶ 卵膜(名) 『生』 『獨』 卵に受精したる卵又は胎兒を被包する薄き膜。胎膜。

らんぶ らんま(名) 『らんみやく(亂脈)の訛』 入りみだれたること。混雜。『蔵内の語』

らんぶ 爛漫(名) 『爛』 漫の字は、漫が、上の欄の字の偏に同化したるものなること。『輻湊』を『輻輳』と書くに至れると同類の用法にて、支那六朝以後、詩詞に多く見ゆ。『莊子の在宥篇に』 大德不

同、性命命漫矣。王延壽の魯靈光殿賦に『流離爛漫』とあり。満ちて溢れんとするさま。勢盛んに、光彩のあらはれるさま。淋漓。『天良爛漫』 『吳融の詩に』 滿樹和嬌爛漫紅とあり。花の咲き亂れたるさま。『王褒の洞簫賦に』 惶惶爛漫、亡、糊失、焉とあり。次條に同じ。

らんぶ 爛漫(名) 『淮南子の覽冥訓篇に』 夏桀之時、主闇晦而不明、道淵漫而不修とあり。亂るさま。

らんぶ 亂漫(名) 『世の亂れたるさま。』 盛衰五濁(ウ)の亂漫の今に至るまでも、大業廣まりたまへり。同『濁世』の亂漫の折といひながら、心うかりける事どもなり。

らんぶ 亂丸(名) 『人』 らんざん(森蘭らんみん 亂民(名) 黨を結びて、社會の安寧秩序を亂す民。

らんぶ 亂脈(名) みだれて、筋道の立たぬこと。亂雜。

らんぶ 鸞鳴(名) 鸞の鳴くこと。らんぶ 卵鳴(名) 『鸞卵を加へて打ちたる鸞琴切。らんぎり。』 『東京市日本橋區北横濱(ウ)町及び本所區押上(ウ)町にありし鸞琴屋。』

らんぶ 藍面(名) あをき面色。らんぶ もん(名) 馬の庭乗の一種。曲乗りといふ。『古語』 大驚御隨身四人と、わ

らんば

らんびき

らんぶ

らんま

